G
163

逍遙文庫
文庫６
292

信行自然和讃念佛随喜證誠讃の詞

夫此巻の行法ハ加祐法師が底ゟ慈悲よりおこりて善巧方便にて勤る者なり。悉是を欲する人ハ全文を口誦決定し。又法味を得らんと云ふ者ハ自ら是を行じて知るべし是をもつて随喜し称嘆して深く慕ふ者ハ即覚照法師が跋を添ふこれなり豈獨照師が跋を添ふにかぎらん或ハ是を伝受し遠近に是を勧て信行する者自ら縦耳に満ずとも数多の訓譜和讃ハ我が心にまかせて。五念五正の中の讃嘆を修するげ念佛ハ讃文に還して。

文庫6
292

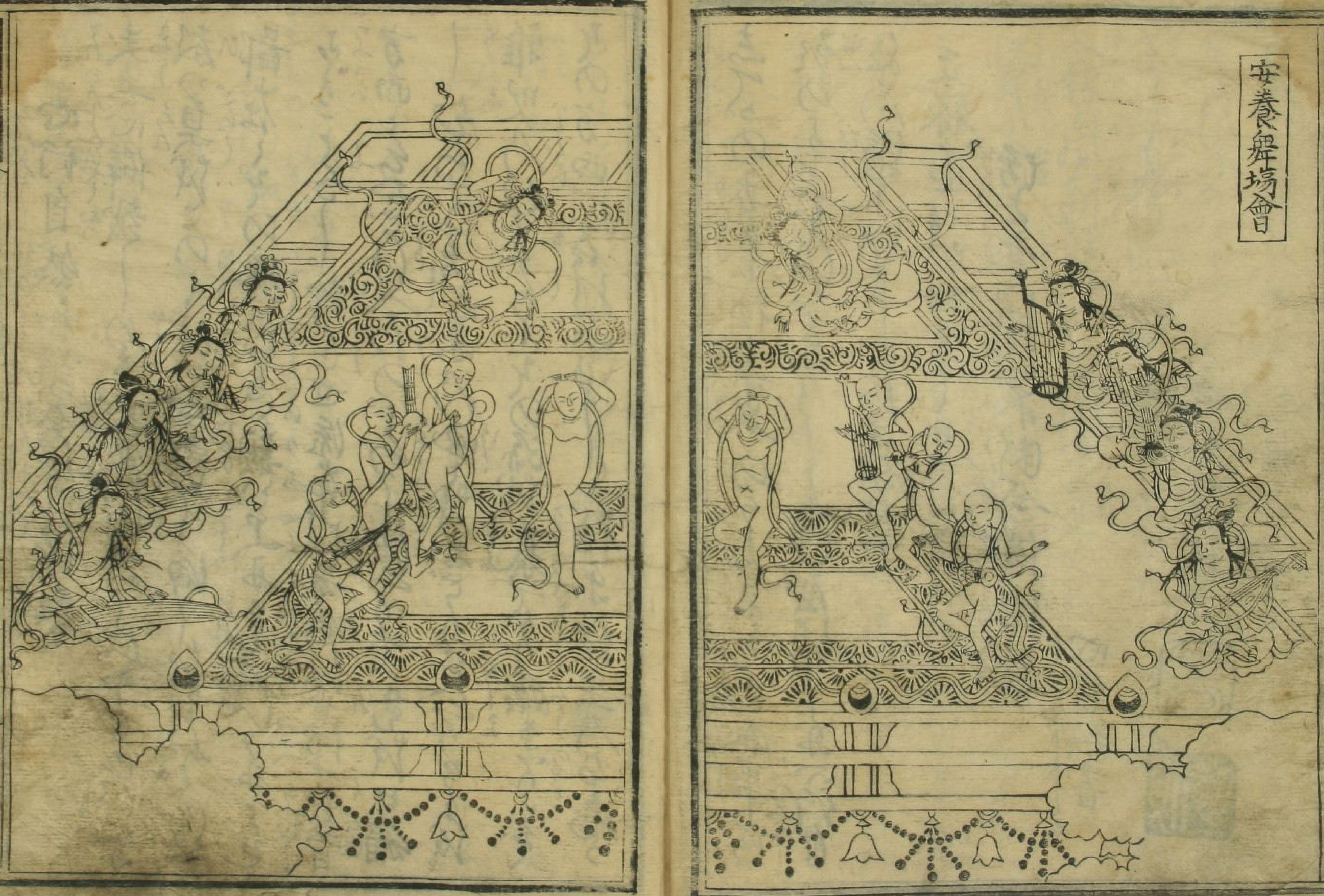
自然に正業を積、誦し鼓楽し法則を学て心大観の
よそおひハ枝葉なり。嗚呼彼ハ不信無慚のなすところ遊
戯の歌に数をよせいで、是が乱舞の拍子にまぎらかし
をさへ、貴と賤と共に誦し歎と踊と交りを同く和合海
の妙用を得て只念じぬ。只能時を知り所に随ひ機に應じ
て施を以て圓法を施し人をたゞ様〻にして善知識
にゆだねむ。人皆一期の往生をのぞみ極楽をねがはせて。祐法師が
る法を興まで、誠に是三仏大悲の和祐法師の
ものし。詞ぞ唯法師が自剃髪なん。是を法に勤て讃

に時ハ却て妄念散乱の俗を懐て縁ある念仏三昧の
発る心をもうしなはしむ。然ば此方誦念佛を
法ものする者ハ皆悪意真実の道場なれ。在〻に是を流布
し法器を退て流を作うれば、ちやく玄高周遍の法潤
こぼす利。家は万荒を後に伝へんとや。また幼児の戯を歴むい
るハ彼をゆるして聴に流れる盆の踊ハ濁れ流にそむかば。
是を用かして清みに念しむ。動をやめて止をも求る上士を
盆を以はいのらで動を用て動をやむるハ下愚をもうし
さ堵し。今此の法ハそれその詞もあるに浄土の聖衆の

生の人を得て。歓喜踊躍し。歓[illegible]し接[illegible]し給ふのよろこびふかくして。本願念仏の易行をもつて。衆善に超過し無始の罪障を消滅して。かぎりなき輪廻を断。[illegible]入報土の大利を[illegible]身に余りて。[illegible]念仏をもつて。聖衆[illegible]迎接の大悲に[illegible]観[illegible]我今幸に此事を[illegible]也。然ども心更に踊躍を[illegible]是を[illegible]の[illegible]道場壇を写し伝て。詞も共に記[illegible]

[illegible]の安養極楽界の[illegible]尚此事は[illegible]自[illegible]ひとをも[illegible]往生の道にいらしめむことを[illegible]

元禄十四辛巳初夏之日
増上寺別請不断念佛結衆
心岩敬書



安養舞場會

心行自然和讃念佛縁起

夫妄心僻越しぬれバ万行いたづらにかざりて行教ハ真妙このしく法ハ正なりといへども。遍鄙在ゝの衆庶をし。類ハ又是をいのちとせざることなし。抑近世流布の専念仏ハ。俗て云昔彼西方と云おどけ入道のいづくとありて。是を口遍し。さるに宗門の事をしばしおごり絶入ざりける。稚児のむらがりて。其の深をも慕てより嬉さかぎりなく。其の西方に名をかゝりし。極楽往生乃望を

きざりきれが名を流布て。結縁せあれどもかなし。時うつりて。世の衰へて今ハ新にかゞゆるものハ一向宗ひよりなし。或ハ血盆念仏又ハ十九夜念仏などゝてまじへて流行むるもの。其その縁乃名をうしんハ。其志の人意のよろこぶ所なるまで。その安心乃趣を又まして決定往生ハさまあるかハいかにぞして或ハ急疑よりさへ帰をの現世に安穏ならんず為に是を流すめ。又ハ産死の女の後の世とて血盆を知るといんなどゝ云て是を汲もむハ是こたふるかたふ

阿しまゝや。或人庭樹の葉にて。月の障を払て
利鎌を用て其の枝葉をうちはらひしに。後の
に光を愛せしが。何る事なりて。むこたへ
ども。夜毎に月を見まる秋をおもふうらみ母
ありて。幾度か枝はらへども。人数で其根を切
らねば。ついにやまず。永く遠行を絶みて。常住の月を
愛敬しとぞ。要よ本を切ば。利鎌の力なりとも
有る所は。ありしこゝろにまつりこそ。是を念
おすて。あらしまや。阿弥陀佛のおん名号は速に

生死輪廻を切断する利剣は。是を用て。
血の池にまて云い。実は（[illegible]）枝
樹は枝葉なり。一分の若葉をまね
うれば随はまごと。余の業苦をまぬがれ生じて
輪廻をよせむ時なし。若是を以て逃れ出で
月の時いまらまらよ生死の根を切断する
がゆへに。永く輪廻の苦業をまぬがれ
ぞての世にめでたく生れて。快楽をうけ
るべしやよくく念仏往生の法にしたがふの

人は。その勅命をきゝうけまつると。尚ごとく
たゞいまのいのちつきて。此身は只に摂取の心光にてらされ
まもりて諸仏護念の幸を受て摂擁護のおそ
れをなくし。身は娑婆にありながらも。当果は蓮
は極楽の金池の中に生じ。りくや聖衆の数に
いる事は。迷ひもなく是いはゞ諸経の法に如是の
大利や。かゝるありがたき妙行なりし。生稀
に。此勝縁にあひまつる事。曠劫の善運
なるべしと喜ぶべしや。このよろこびとなして

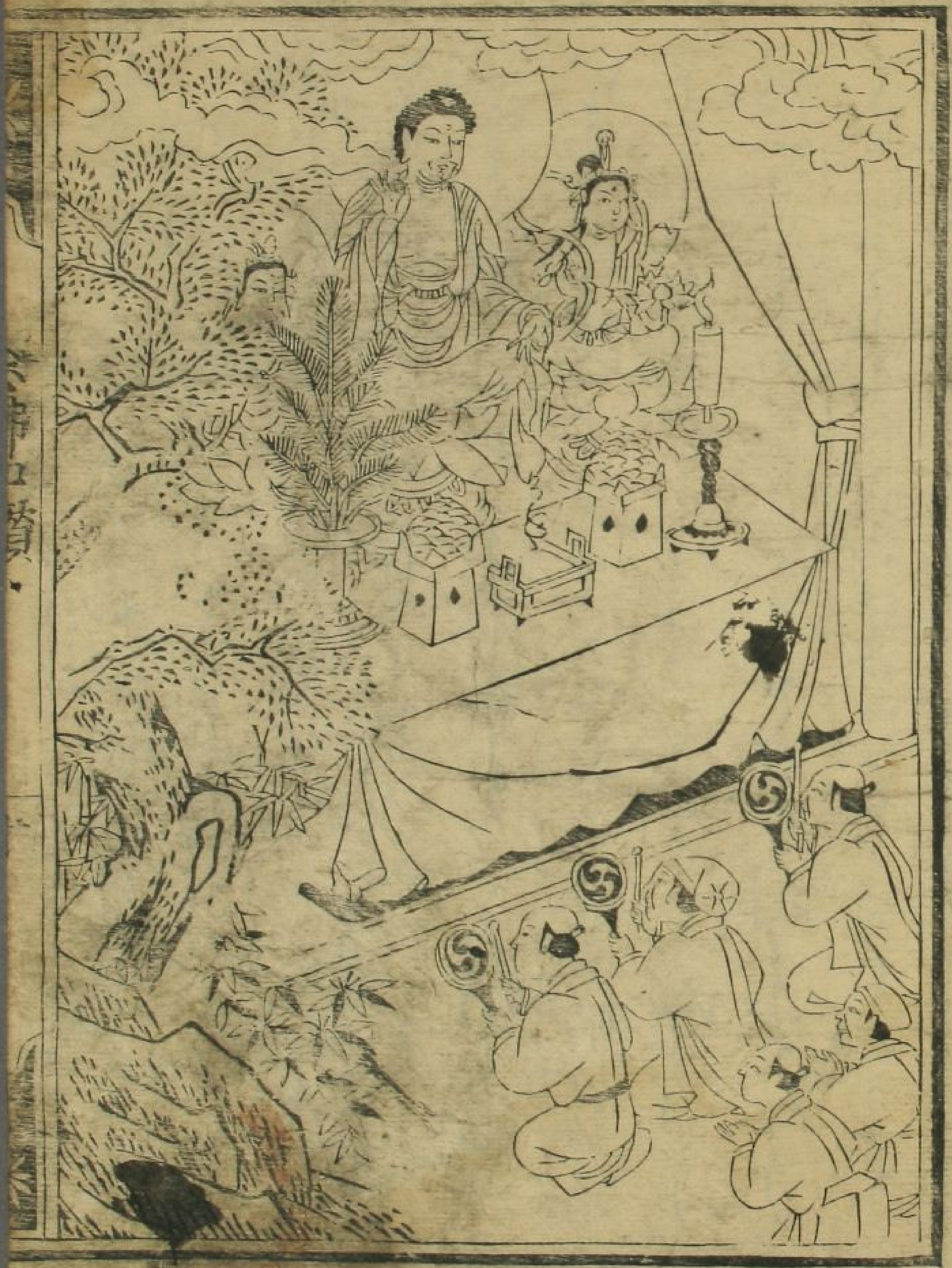
須臾の往業を成ぜしては。又いはゆる凡夫往生
の秘門。さらにばかりまた一声尊一念の法にあるをみな
此定往生の正因なりとぞ述べし。この世流
布の念仏者は聞に。譲は浮語雑話はいた
め綴く生起もる所をかく。更に機は記さ
法は生るれ彼つまみなはしぞ。かくとなや大聖
釈尊の御法をも。讃嘆なは思裏記なし
金口むなしからず。毎日にきて是なりまし
て彼をきけ入ての念仏の業定まる経釈

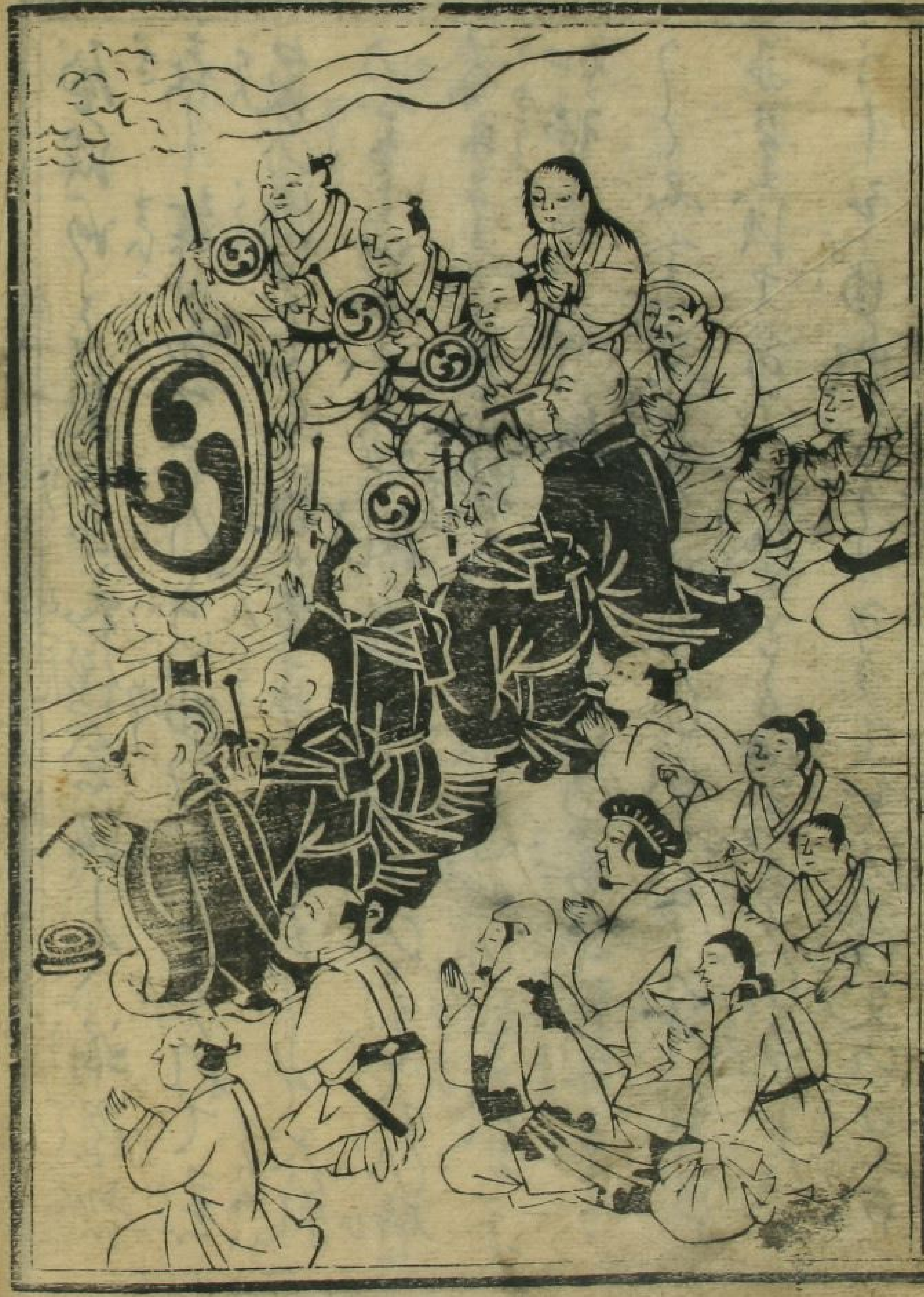
識とはなれて。時なり縁あれやまさるも。齋が勤むる
所なれんや。爰に加祐和尚と云人有。我が先輩
なりしが。とかく教識の業をかさねてありしが。
久しく名徒の中にまじはりを離れて。身を塵中に
埋。ここかしこ名利を捨て。定めなくも所をさだめ
ず。もとより稱名に勤じしと。老が後しばらく
のうちも。おりから身を療養して。せい
ざいむしろ青蓮の草庵にこもりましまし
時。我にさて後ずし給同して。病悩は悩と

むかひ。床に志ましまして志いかなる法要をなすべけ
ればと。師弟こゝに云昔子の法。郡がもの。諸書
にはしめされり。志は誠にして上古の先
賢に求む。悔し己が衣裏の法珠を以て便
かれ浄業にはげむ男子は。成就すべし。何
ぞかならむ。されば去人皆清家の露を
うちへりてあそびて。急ぎてうしまちたるも
ぎらんや。我が在の如きのは一向にと相の類
なり。嫌うかしまけるまにかれのくまかぞへ

こゝにおいて。無縁の悲心なほざりにはしつされ
云出る詞に萌せり。折しも友に語して狂言綺語
に寄し廣く老若男女の口のまゝに便りとして
念仏法縁をもすゝめ。自他往生のたすけと
ならん念仏は。法やはりまし時うしと云へば。
師せまらしに猛然げことに此が膝し
く身をすゝめて。おこなひ讃ものなり。
そしめて吾子すゝめもと念仏して。是
より[illegible]の数は出し。是はうらて

念仏はかゝる。時に和讃合はして。踊躍歓
喜し舞をどりてしれき、妙句を云はずれて靈
鸞の涌がごとく。雅音を平はおどろかして。天樂
の響とはやしむ。凡聖讃歎そのようにおい壁
念仏にまゝふうま、疑らくは彼慈悲の如来光小
加祐して。歌舞の菩薩の姿小現ならう
うしろみへ志に其に謡ひ。同くおどりて。ゑ
みえばおの口讃よりにたてひ。色をひや
うしろ。由[illegible]ありて。その讃文の口言、





我が身に入ぬるも如説の法を聴聞するが
ごとく。我が心おのづからもよろこびうるほひて
終に踊念仏の結衆となりて此縁にまかせて
まかせて十二條百七十首の和讃を吟詠し
心の内に縁をふかくおもひとりければしぐるゝ時も睡は
いとまをのぞきては皆此三昧に時を送
りぬ。其志しあるの男女えらまず婦なり
結ぶくよりえらくも置く村ふうう
ての人とふまれ我口に絶ざるハあくへ田うたに

をもはず用ひ。草かりの童をもはやとゝのへてく
我々と云よ。心行自然に成就するをも多し
抑ハ此法時にかなひ。所に應じて功多し
うべし。持名の助業をはしくおもくいましむとと
ぞおぼゆ。又問て此法古今のまゝし希なるへし
をりやとおもへば師の云兎讃嘆和
雅の法ハ浄禅母通用まうること。我が縁經
りけれしかうして此母急ぎはつ心をすゝめハざる
やぞの外三朝古今の和讃との事ハ。その教

奥し。他日彼時て志ゆるも通しとぞ又鏡方西念仏ハいづれど尋けまじ。是をなハゆんくあゞはとの彼人口れ偈へ何やまおりて句言将察し侍し決。今我が浅し和讃を更ほふハ何やすりらへこゝ。まうんどいうまこきと。玄ふ無言をふ彼法じて。次第彼うくい。始終を写し志て通そく。終西書を彼おして。心行自然和讃念仏となづけ。縁起の彼深て梓ふらりだめ。有縁ふ結通んと云余

元禄十三（庚辰）暦十月弥陀感應日

野下州芳賀郡

名越末流

良單仰視

良三親阿

謹記

讃揚歌歎踊躍歡喜古今之例・

無量壽經曰咸然奏天樂暢發和雅音歌歎最勝尊供養無量覺安養曾更見世尊則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜娑婆

如來出于西天聖教流于五竺矣称揚佛德興讃詠之禮也馬鳴龍樹二大士説偈述讃普奉行矣從不讃称歌詠傳支邦隆如流行也（南海寄帰傳取意）

安養報國有七寶林和清涼風出五會音声微妙宮商也善導大師法照國師共興五會教讃・并念佛

盛栄遐代也（五會法事讃 蓮宗寶鑑）

又彼界有八功德池摸金水之浪響則引声弥陀經同念佛縁起也文殊菩薩来法道和尚所感而則慈覺大師傳来弘和國也（古事談 眞如堂縁起）

釋迦和讃　○舍利和讃　・法華經和讃　・弥陀經和讃　○弘願和讃　○迎接和讃（惠心僧都作）

○當摩曼陀羅和讃（武陵称住院声譽助給作）

・○無常和讃　○末法和讃　○六道和讃

○地藏和讃（傳云高野山睿快作）　○天台和讃（讃智者大師德）

○善導和讃（讃光明大師德 鎮西作）　○圓光大師讃（安井門跡之御製）

○空阿弥陀佛和讃（黒谷繪詞傳 凡和讃於称名繁行從此人始也）

○良忠上人自称和讃念佛（上人童形為離塵入寺 元旦和讃念佛礼佛）（事實具在然阿傳）

○遊行念佛本是起唐土少康禅師而和國空也上人并一遍上人同景慕行之矣

○念佛往生要歌（雲居禅師作）

○諸宗皆有家家和讃伽陀声明鼓樂調子擇其能者作哀鳴和雅音聲明徹雄朗讃揚三寶之德早感

不心遠令催誠信者豈是爲不善巧也今廿分以所見聞列記之亦那盡是乎

心行自然和讃念佛目録

第一　念佛大綱
第二　女人疑滞
第三　女人求法
第四　女人往生
第五　安心决定
第六　臨終正念
第七　光明攝取
第八　念佛生蓮

第九　至心發願（ししんほつぐわん）
第十　至心勸請（ししんくわんじやう）
第十一　至心廻向（ししんゑかう）
第十二　歡喜踊躍（くわんぎゆやく）
　已上（いじやう）　附（ふろく）
○祭文（さいもん）○一枚起請（いちまいきしやう）○講會讃（かうゑさん）○灕散（まんさん）
首尾總附（しゆびさうふ）　隨喜證讃（ずいきしやうさん）　和讃緣起（わさんゑんぎ）
古今讃例（ここんさんれい）　疉字付助（うつかじふじよ）　跋并附録（ばつならびにふろく）

○和讃（わさん）

句（く）ごとに念佛（ねんぶつ）をとなへて音頭（おんどう）同行（どうぎやう）異口同音（いくどうおん）常（つね）には和讃（わさん）ばかりもつとむべし

○踊（おどり）

音頭（おんどう）はさきにたち右（みぎ）にめぐりてひきまはし中（ちう）に立（たち）てたどるべし上下（かみしも）の句頭（くがしら）に身（み）と手（て）とを右（みぎ）の方（かた）へかたぶけふりて左（ひだり）の方（かた）へふりかへべし右（みぎ）へふり出（いだ）す時（とき）は右（みぎ）の足（あし）をふみ左（ひだり）のあしをうかし左（ひだり）へふりかへす時（とき）は左（ひだり）の足（あし）を

むこきれおしとうかまへし手をひしと下へ
むかりむけべし是唱陽より陰よむかふ
自然の道理なり但和讃の法をむかしめと
とめたまりあいかゝらず一同よ合掌すべし
此外にハ何の様様も付べからず我がくの
まゝにて只たふとやうれしやとのミ思ふべし

○　急念

音頭和讃をとなへかけ同行念仏をつけます
ゆしひやうしあり

○　祭文

音頭祭文を誦し同行念仏にてとめます
ゆしひやうしあり

○　音聲

陰陽自然の調子をやはらげ聲明にゆるに
たるふしなり

○　歴字

天地ひらけ神代ちゞまりてより大和言葉をもつ
からたりて人よまかきしが唐國の字書渡りて

よりてそれに和訓を付て。かなうしをとなへる事久し。其内有る事。就中にして言葉も読まれるハ。悪ハ上中下を略して用ひ。其たらざるハかな字をとゝのへ。これごとひとつもせ。たとへば水中に沈を泥といひ。是が訓をひぢりこといひ。又どろともよむ。ひぢりこといひぢハ水にひぢちの略語なり。古語の溝ひぢてむすびしあなどゝいふみて知べし。里にうたふ字ありて心なし。これ粉なり。海うなるこれなよひらりてやわらぎとうけたるなり。

下略してどろとのミ云。和語なれバあらし。もじ心一字なれバむすびわるもののぞきこハ由るたゞし。めづらしきにわらず。松哉とまつえやミへて。やさしき歌よみとなへざるなまつぢえと用ひ来なり。拝眼如絶の為しるせそれをなりひ多し。今世和讃の和讃も略し。調子にかけて唱る時ハ音声をゝこる和讃もなりて読加へたふとべき音を月題にまなす山字ものなり。慈覚大師入唐して引声のかの五絶経に嵩の

念佛を修し來たまひしが。此聲は極樂界乃。一切衆生の耳をとほる調子にして文殊菩薩なりしより法照和尚にうけさづかりたまひしとなん。御綱の後は常に樂にあはせてととなへし。經文はやゝとゞまるを惜みて。釋尊はなかりせて獨り咲たまひけれ是等純如是功德莊嚴と云所よりうつて音韻さらにかはるわざとおもふ時行者常に歴の松の嵐なうして彼所を吹わたせんと書しこたまひしと虚空に辭へ

してやれ尊とのたまへよと告わたりければ。よろこびそれより成就如是や功德莊嚴と吹たまひければ。をしへてこれを得る所なかりしとなん。古事談是に例するに。此なるべし。能はたがはぬ事と傳じ。和讃念佛。上下の句ごとに。よの音といへ。又讃の句中にも。なをしをいれてたすけあはす事。そのつかうところ。章句にやとよとおひかよふ音なれども。かつ乃縁を遠からじとゝなどおもとを句毎に儀ならずして。眠に付し夜のうちに。いつしか辭りてよの音を

なへたすくる事（こと）。たゞそれとすべからず。とハかどうし
教（をしへ）ハたまれとぞ告（つげ）られける。是又（これまた）たとへ愚痴（ぐち）なり
れど。わづかところわりちがうして有智（うち）の人（ひと）り
飾（かざ）りて弥（み）称けれど。與（よ）ハおろくめてかどとし
すと覚（えん）じ。譽（よ）ハほまれすりて歓譽（かんよ）の例（れい）なるべし。
此和讃念佛（このわさんねんぶつ）を人（ひと）よほどうしれとめしむる時（とき）に
人をのぞくる念佛（ねんぶつ）して五（ご）種の和與（わよ）かなくずがたふ
姻るべし。猶さも是（これ）此行法（このぎやうぼう）ハほまれしとほどとま
法（のり）あしといひさうれき

陽　南無阿彌陀佛　南無阿弥陀

陰　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀

陽　たすけたまへやあみださまう

陰　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀

釋迦佛乃教の法よきゝがいて
罪ふかき身を弥陀は渡かする
弥陀及釈迦のうけとり給ふ此身をぞ
諸天諸神も守重給ふ
仏神の守り給ふ身にあれど
横病横死厄難ぞなし

心行自然和讃念佛

至心十念

光明遍照　十方世界
念佛衆生　攝取不捨

へ第一　念佛大綱

毎時ノ行法開口先ッ可レ称ニ此ノ文ヲ也

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
たすけたまへやあみだ佛
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

○あみだほとけのいにしへよ　し

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

まうせんしゆじやうとおぼしめして　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○ごこうしゆい乃そのうへに　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

だいひのごぐわんをたてたまふ　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○それぐわんじやうじゆねんためよ　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

てうせんらぎやうとあそばしける　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○あんさのふかされごてろうを　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

いまれわれらがためぞかし　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○すでにごしゆぎやうこうはもわ　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀

十こういぜんのかこあづき　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○はそこれゑりきのあけぼのま　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
あみだほとけとなりたまふ　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○ごくらくじやうどのしやうごんを　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
おろどくこんりうなされつく　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○そのちるりの（ち）うてなにも　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
よそほひたりく（ち）ざしたまふ　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○そのときわれらがわうじやうの　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
みちをばきわめ（ち）とられたり　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○さてハわれらがにせのミを　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
すくうほとけハあみだぶつ　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○たのむこころをまめやうよ　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
まうすばかりとしるべきぞ　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
○ゆくゑさとるもこのそれの　よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
ぎやんとごねんのちかいあり　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
たすけたまへやあみだ佛　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

△第二　十念　女人疑滞（にょえぎたい）

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀　ヨ

○ぜんまんあくにんをしなべて よ
おととねぶつのへだてなく よ
○ゑくもさぬごぜんとさてながら よ
さてつとも(子)ひだちがし よ
○なかよねぶつのつゑなさま よ
いかのずがたをひきかへて よ
○わまやほうりしのことゝなり よ
こゝろもすら(子)しきようして よ
○たのまむほとけもいまいとぞ よ

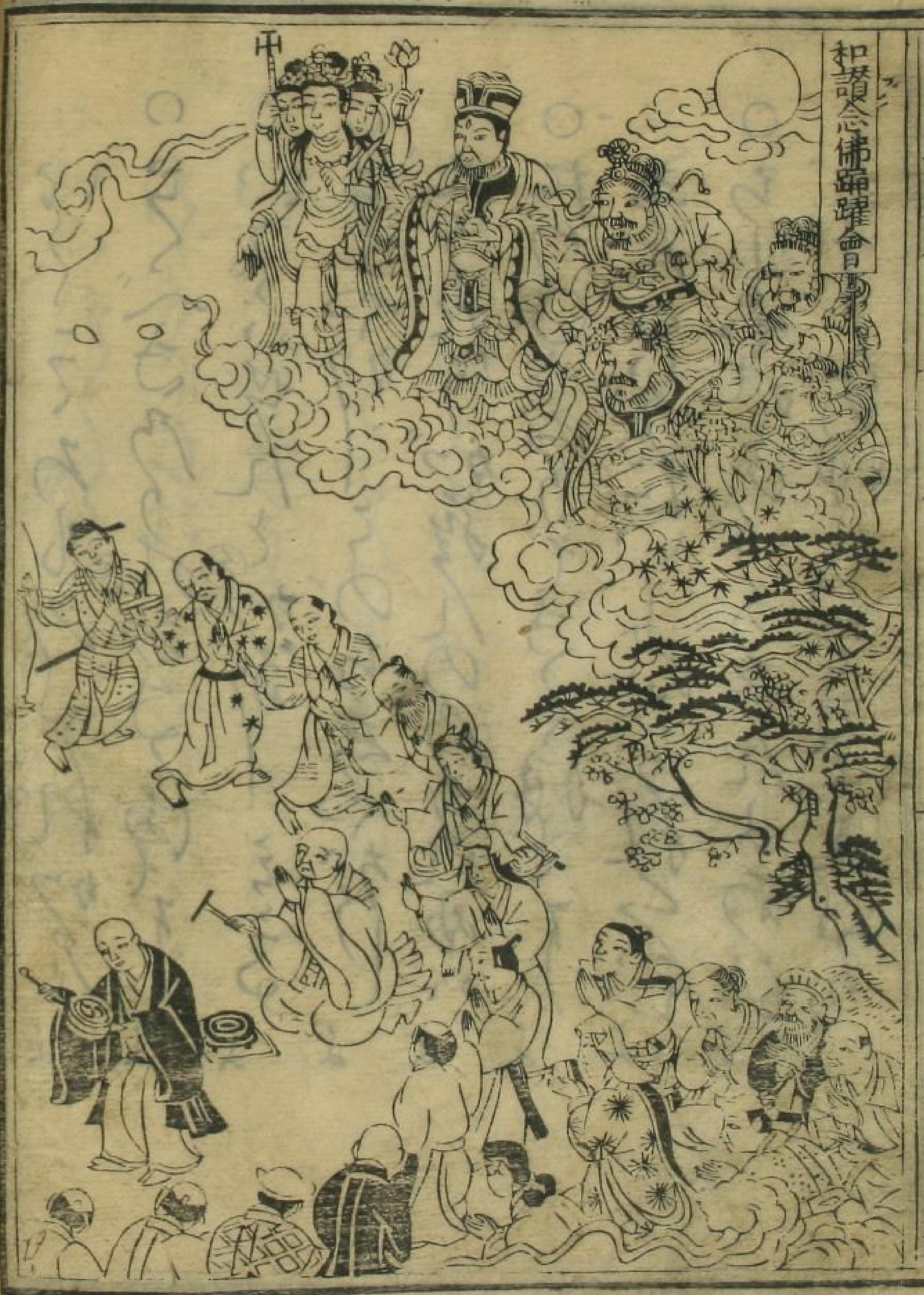
うきひきたまふ(子)こゝなりん よ
○はことねぶつをとこよ利 よ
あくごうぶ(子)くうせまはき よ
○ほうけれのま(子)のにまごゝろり よ
三ぞう(子)うしゑやうこちじやめり よ
○それはとどうき(子)まひと乃 よ
こゝろれうちて(子)しきゑたり よ
○まゞよくぶく(子)ちそわしや よ
そしまいそまりぞやぎくぢ(子)ん よ

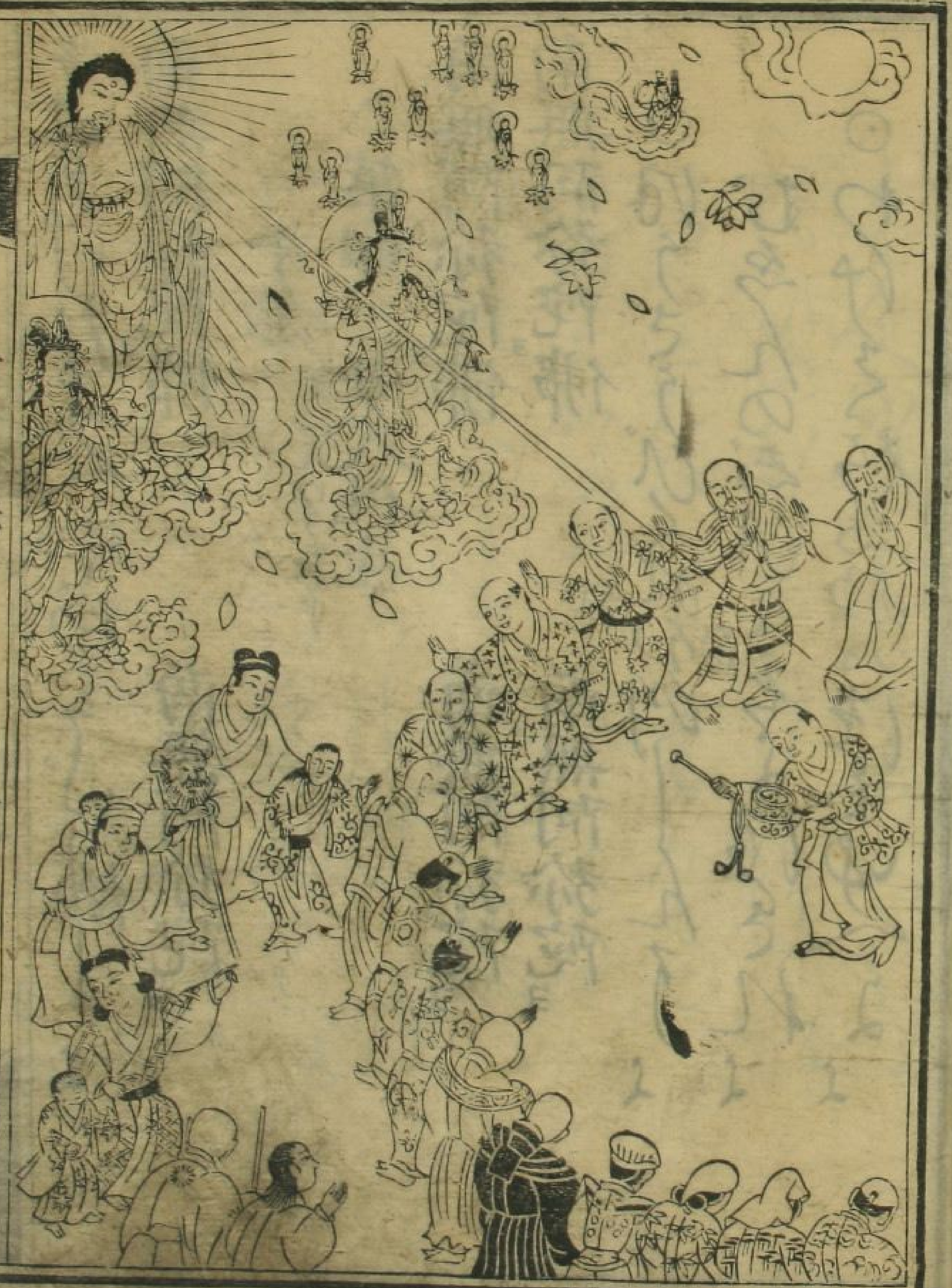
○あいよくゑようぞまてひとゑんよ
○それほりかおもひくおそふこゑよ
○おしとおもことよしなべてよ
○流三なうずとゑおもされずよ
○けめやぶりじん三ぼう乃よ
にくミたまふもこゝろよ
さんすけたまへやいのみづ佛ーよ
南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ
十念

△第三　女人求法（にょにんぐほう）　踊念佛（おどりねんぶつ）
南無阿弥陀佛ゴ　　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ
○これにごりゐるちやぞまぞてよ
○かうやらんがうひえのやまよ
○姆じやゆどのだけくもよ
○けつかいざんとそ乃ばゞれどもよ
○それかうたうきのりのみちよ
かぎさしわづらめもいとまくよ

○まして十かうじやう(子)だうかハよ
こばそをうちて(子)いましれずよ
○ぢごくとがきと(子)ちくしやうれよ
みつのみちよりおッゑくたぐよ
○してゆくざきかへなくてよ
あきられもそてくるおかれらやよ
○ゆてむじやう(子)いはそしてよ
ほぎまりきたる(子)つ(子)れこ若よ
○あちほそくかひも(子)いはせてよ

ごくこそわもみなれじがんよ
○らくべきのりな(子)き海すよ
いちはいせんと(子)がなしこころよ
○らやかしこのちしやかうしよ
だうたうが羅んのありあハよ
○たう○めぐりてさくほどすよ
ゑんらうだいしれまがれらむよ
○ちしやかこのりのゑんよおひよ
ごゑんのゆらいをきてえらりよ


和讃念佛踊躍會圖



たすけたまへやあみだ佛よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

△第四　十念　女人往生（によにんわうぢやう）

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

南無阿弥陀佛　南無阿弥陀ヨ

○ほうざうびくれ(子)おわしんり　よ

むゑんのおもひよ(子)もよほされ　よ

⊙わけてにょにんハはきゆへ　よ

ますべあさこそれてうやむそ　よ

○だいひのむねを(子)こがしきく　よ

さくこたそうるごぜんぞと　よ

○きけむにょにんハをうこしれも　よ

のちれよのこまたみをしや　よ

○まるそれうへの(子)ごしゆい　よ

わかへむにょにんハちぢぬうく　よ

○おにくはそうくもうおもひ　よ

ゑしやいりどうしかハぜむ　よ

○あんぎやうくぎやうえきなしこよ

○ねうくびごゞまんとたてまふよ

○たとこまひとつのごゞまんさくよ

そのねんぶつもうしひとぞなしよ

○ゆしてほとけのおんめぐみよ

わけくあさきをかけおじのこ

○むすぶのちぎりのちかひじるよ

ふるじいまぞそのおんなれざよ

○たのむこころあれひともじ越よ

せりしあれきてようちうきてよ

○ねられにごまんてをひかれよ

もろもろのうそなかまのゞはるなまよ

まんまう浮たまへやみだ佛よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

△第五　十念　安心決定（あんじんけつぢやう）

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

○おそれ六銭さくへまのミぢゑ　よ
まけてあさひのぬりけまぞ　よ
○たまきゝのちからそいくして　よ
きうさてもひたるふゆへ　よ
○しよづ川かざ川はほめられて　よ
てうせれござんこゝのるかり　よ
○海してをこたまのつ○　よ
とてろれもあくかうゝゑあり　よ
○かゝんやほとけは海をゝれて　よ

づ川しのたゑんもふかけまぞ　よ
○乃りをきくかもうゝやがゝで　よ
祢がふてころもゝさ海しゝ　よ
○みづもよろこびおぼさんは　よ
うちかゝめゝる乃ちれよや　よ
○うれをおもふよなかぞ姥の　よ
わまよきゞいの志ゝれふり　よ
○おゝ姥をだみもきゝさねむ　よ
ましてとゝこゝいとやすし　よ

○あくにんだにしらくきのだもよ
御してつとごうすさぞや　よ
○ずらし御うすもそしさ孫ぞよ
御してひまれくともあしやぞやよ
○かゝるあまのきたりこりる　よ
よにあつひとたのもしや　よ
ぞんずけたまへやかのそず佛　よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
十念

△第六　臨終（りんじうしやうねん）正念

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

○さぞなたとへおかのこそも　よ
あやうげもなくおもへども　よ
○おごりてれひとのさいごみる　よ
ぼ御のあらましきのまゝも　よ
○ゑくらゐつそだんがいく　よ
はくりきするりんとがれ　よ

○むくひのぢもしはせゑきたるよ
まりおくだりひんとうすよ
○ひとかうおくぬさころゑてよ
びやうじやしやうはんぞうすれぜよ
○みなけぢらうもさまの御じよ
ひとのちかいもかみの御じよ
○しうまおれじともらいかめの銭よ
ほとけのかつ○そぐらんずれぜよ
○とゝきへとたゞくもをれまへすよ

しやうじゆとらへなだけつくよ
○じひをとらへてまへすられぞよ
こゝろゞるこゝもおくよ
○かゝけのいつかきはきれぞよ
はなれむくひもきえうせてよ
○しやうじあれゑかぎおもくとよ
たゞいむとすまでごくらくのよ
○まゐのうそふときくかゝよ
みゞぞうのむこのたのもしやよ

たすけたまへやあみだ佛よ

南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ

△第七　十念　光明攝取（くわうみやうせつしゆ）

南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ

南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀ヨ

○ひかりあまねくてらせどもよ

○わけてねんぶつしゆじやうをぞよ

○をさめとるとぞきこえけるよ

いかなるゆへかおもひしよ

○むかしわがいんにそのほさつよ

はのにまをりてこくとすてよ

○いのちをはらんそのときはよ

みづからきたりてむかひとるよ

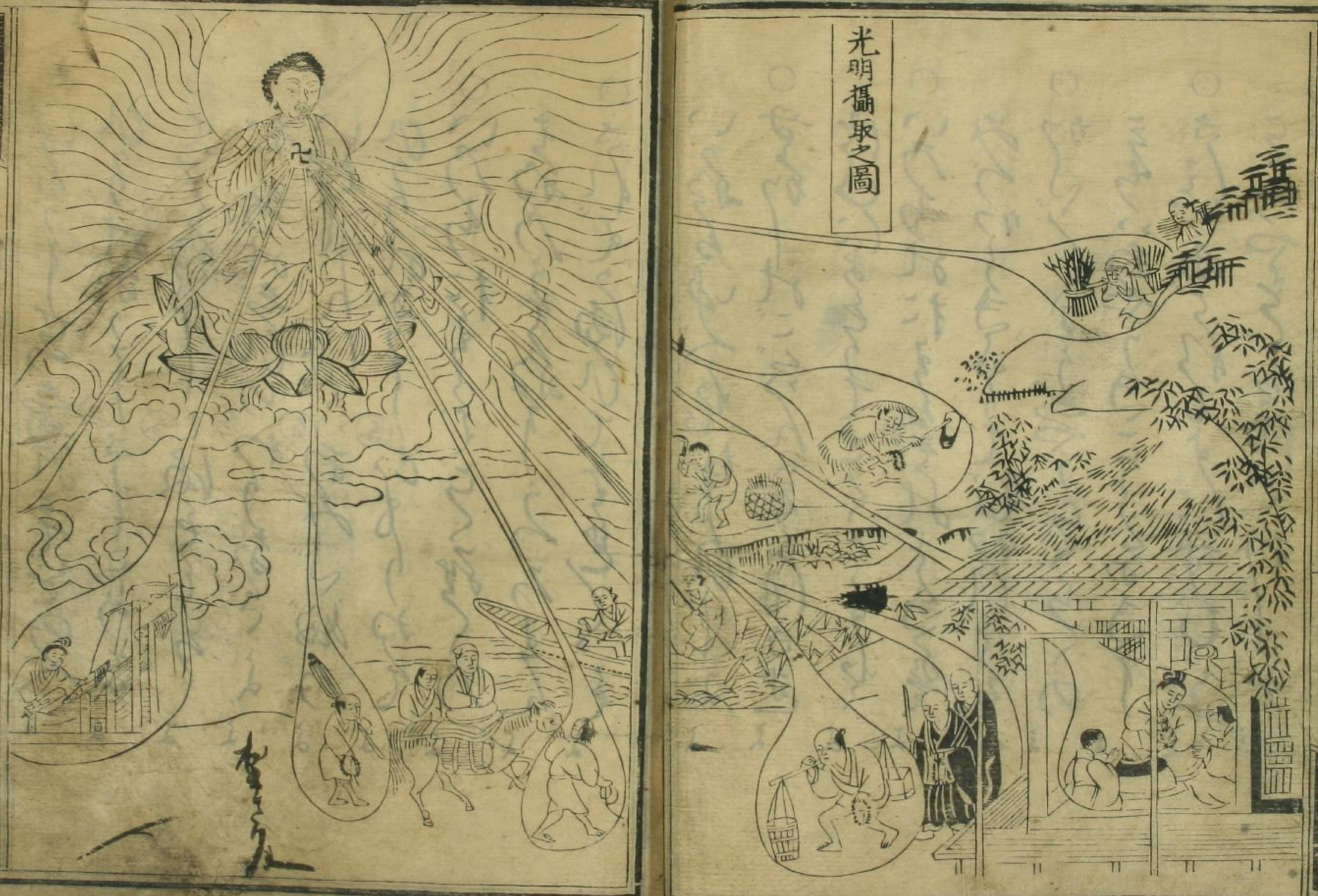
○かならずわうじやうごくらくのよ

みちいはやうきこそおきてよ

○さだめられるよしこすむとよ

ころやもとたをわじとよ

光明攝取之圖



○ばるうりせうじゆれそとのべよ

ひかりのかゞやき(子)さしこむよ

○てをちからし(子)と波をうつよ

ながれのしびの(子)わりあさよ

○いけのほど(子)おみづ娘乃よ

ひかりのかゞやき(子)もりあてよ

○いのちたまごむごく難乃よ

きぬのうそぬりうつろまんよ

○されども酒ひてきせてそよ

つねにひかりのさうりけるよ

○こちまですまで波なやむるよ

ありしほとけのみなを称へよ

まゝすけたまへやあみだ佛よ

南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀ヨ

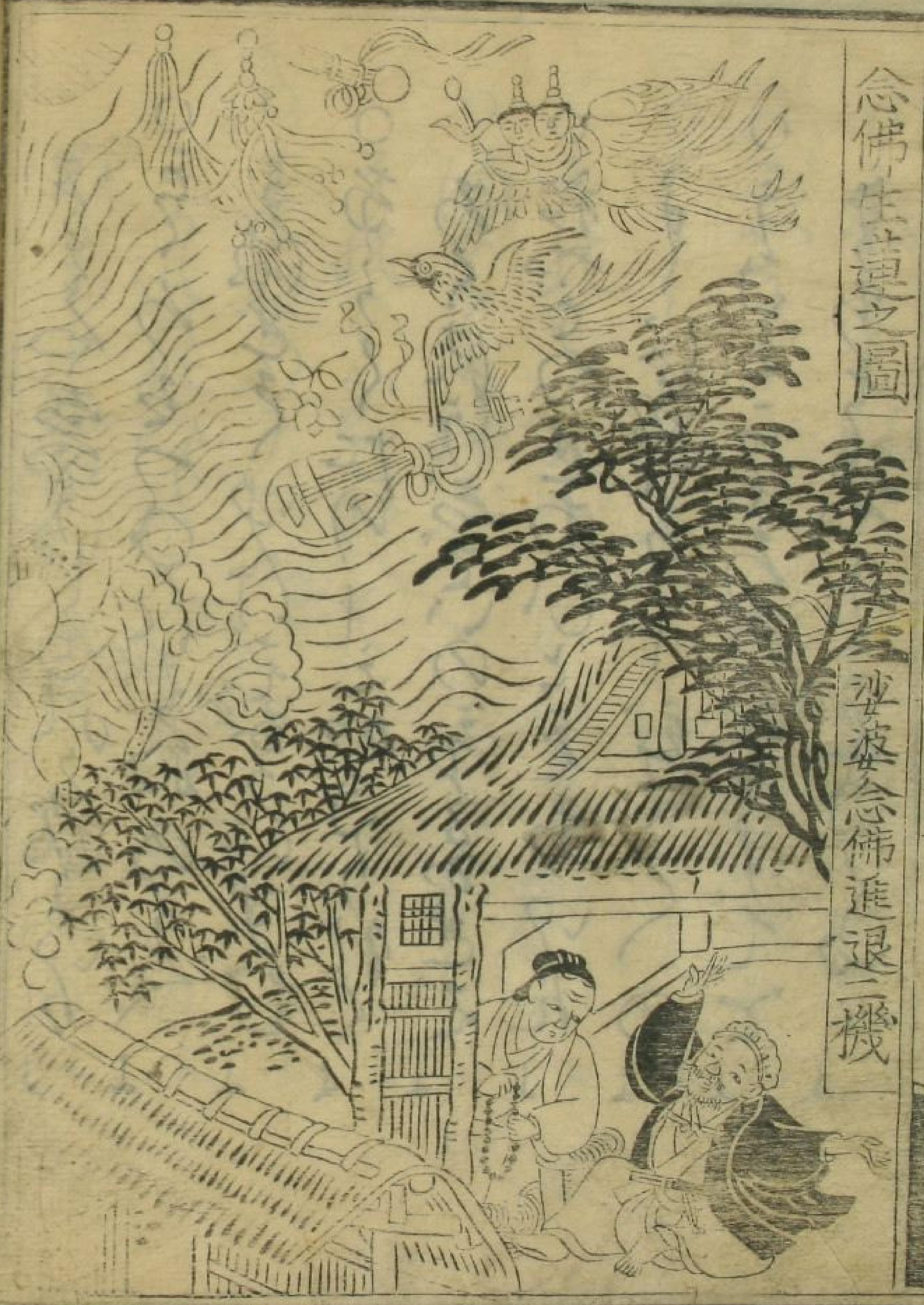
△第八　　十念
念佛生蓮（ねんぶつしやうれん）　　踊念佛（をどりねんぶつ）

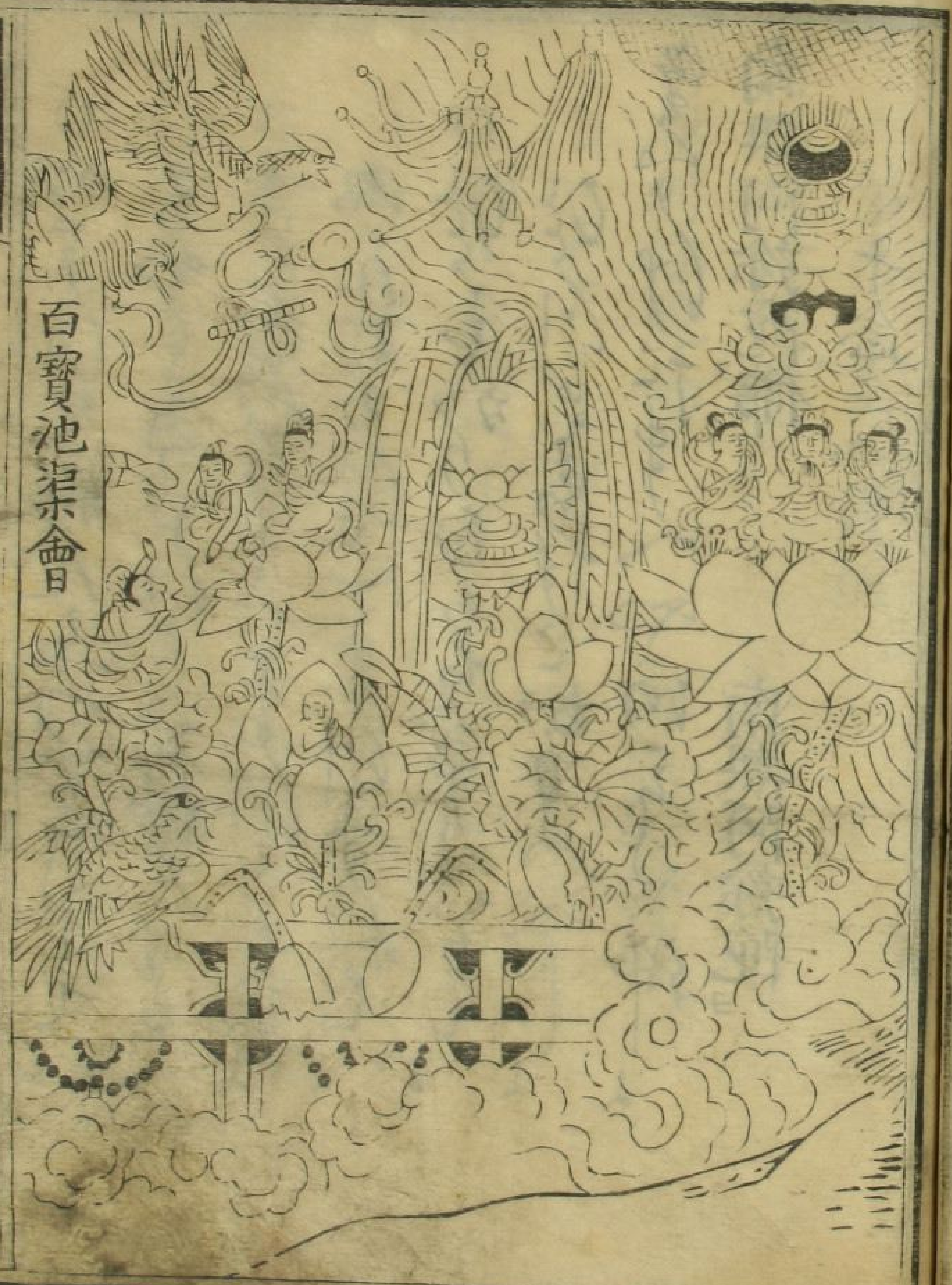
南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ

南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ

○しやばでねんぶつまうさずば　よ
じやうどにまゐりておいづる　よ
○こしもねんぶつをおこしれば　よ
それもねがはゞそかなはま　よ
○念仏よねんぶつとこのふしぎ　よ
われなさかへてひとり念を　よ
○うそねのくゞゐろうして　よ
こゞよこれみづらまちむらぢ　よ
あくまし念かずらく程くの　よ

○こゝやしやうじのうみより　よ
○らくおつるにもねのうへ　よ
う念まくゆげずあうにすむ　よ
○あらくたのしこかざりれく　よ
あくれうぶざいのこゝろまで　よ
○おやこつまあひともちいれ　よ
ましにあしえしむとくの　よ
○うきよこゝろのあかまでと　よ
まちそふやしまんきくゆへ　よ


念佛生蓮之圖
娑婆念佛進退二機


百寶池渠會

○かまひて神んぶつをたのまでよ
もやくされとき神んするよ
○うてかのふしてまいりまでもよ
悪んわるひとをまじりすれどよ
○ひとゝかりあるちぎりさぞもよ
ひとりもちぬすとおもふべしよ
まもりけたまへやかうぞ御よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

十念

△第九　至心發願（ししんほつぐわん）

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

○さても尊しやおがみまにこよ
かゝる凡乃りわまぢうてよ
○ろくだう志やうをはなれがたうよ
かゝきくげんをせしことよ
○さてもう嬉しやい滴さゝよ
かゝるごゑんにあひあうてよ

○これこそわれらがためでよ
たやすくじやうどへゆくことよ
○さてこそわやうさるそんやぞよ
おもへば見ればまづ川ありよ
○さてもたのしやありがたいとよ
いへぞあみだへもぞわたらずよ
○とかでもまいじしもさ地のよれよ
いんぎのほどとりかぎりなりよ
○うさくもうれしも帝よつぞうわよ

らゝろこむまし拖泥のよよ
○なふよりしてきおねんぶつとよ
らもところろよまくゝまゝまいよ
○かならずちかきもおやくそくよ
たがまぞむかひはやまいまへよ
○かへもぐぞごかんぎまんよ
おやまちたのむなむあみだぶつよ
○とてもかくてもこれこそぜよ
なうせまう次ぞうなかんぶつよ

たすけたまへやあみだ佛よ
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀ヨ
十念
△第十合掌至心勧請
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
○ぞくあまねきおねんぶつよ
ゑかうゆうずうたうけやれよ
○大恩教主釋迦尊ウ

西方願主弥陀尊ウ
○観音勢至諸聖衆よ
六方證誠護念佛よ
○微塵刹土諸三寶よ
三國傳燈自他祖よ
○弥陀化身善導公よ
勢至權迹圓光師よ
○念佛相承諸上人よ
人々有縁善知識よ

○佛法守護梵釋四 よ
和光神祇諸冥道 よ
○皇帝聖化無究盡 よ
○將軍國守武運長 よ
天下和順災不起 よ
○國豊民安同歸西 よ
現在兩親得徃生 よ
○同行同伴信增進 ウ゛
六親眷屬前七世 よ

親疎結緣一蓮生 よ
○法界衆生共發心 よ
同生極樂證菩提 よ
たすけたまへやあみだ佛 よ

南無阿弥陀佛ヨ
南無阿弥陀ヨ

十念

△第十一
至心廻向

南無阿弥陀佛ヨ
南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ
南無阿弥陀ヨ

○あくねんまくはぶつぼんの　よ
じひのむらさきちからにて　ゝ
○まうはのたむけたてまつる　よ
のこふそんわるなけふち　よ
○しもはうゑんとけちゑんと　よ
かうくいしじやうにいるまで　よ
○わまてくぞけさせたまへ　よ
ひとつうてなのうへよとこさ　よ
○いおもじくさとりをひらかせて　よ

ごらもにほとけまあしたまへ　よ
○かへをくもあさましき　よ
うくるわくがうふうきこゝろ　よ
○やたけごゝろをつくすとも　よ
ごぼんのちからにまかすずんぞ　よ
○いかでわうじやうごくらくも　よ
ゑかうもごきまうすべき　よ
○ごにもかくもあみだぶつ　よ
まかゝひたまへこのうへを　よ

○なんとむくうもたすかるもよ
いけるわいらもしすときもよ
○らくとうけるもさとるともよ
うねんむねんをすくうともよ
○あくせまうすぞごかんねんよ
たのみまうすぞあみだぶつよ
たすけたまへやあみだ佛よ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
十念

△第十二（合掌）歡喜踊躍（くわんぎゆやく）急（せめ）念佛
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀
○さてもうれしやあみだ仏（ぶつ）
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀
（しもこゝろにいれよおもへ）
ぶつともほうともしらぬみの
○たのむぞうれしるべまで
ごくらくじやうどへゆくことよ
○さてもうれしやあみだぶつ

ぜんともあくともしらぬこが
○ちゝはゝするあ弥ぶつで
たかれうてふにのぼること
○しかぞじやうどのしかれうへ
いさむ弥ぶつれこそつまん
○ごそもかつてもしれみぬを
おもひまつふことぞかし
○さてもうきしやかゝるまに
こゝろのくふうちくらし

○ほとけのむつひとまちかきを
ちゝとすゝまにごくらくの
○しかれうてふにうつろふて
あふぎけくぞせんことよ
○いまもそのちゝよれふかの
ぎうちもこうぎもこぜみゝめ
○ごせいゝせぎのもうきこそ
ねんぶつこそするためよせん
○おやこうれわひしんるいを

いとむつましくかたらわひ

○ここにねぶつをいさませて

おなじくぎやうごへつれゆうん

○まするなくおねんぶつ

つねよりもろさくみをもちて

○むなしくときをとうすなよ

けふにもしれぬぞなむあみぶ

○いましゝすとものちれよの

らうつるをないぞこなひとよ

○こてをとうむくがつてんの

まうせきろうハあみぶに

○このうれしさをとわすれてハ

なにけもかいなくあはさんよ

○みだれこころをとそれまして

まぎれなうくもなむあみ

○うごきかぐれうるはし

だかさつもなからきのまいおどう

○うらくやうらくねぶつうる

たどれやたどじよろこびて
○むかしいこのゑいけいいは
こられらくぶしにまいたどる
○ましてこれずものちれよを
うらあうせへるけらくとや
○みぐへやみぐへごらくを
ぢいぶぢてをとてかくを
○まめもむすこもわらんべを
きうもひなんもをしなべて

○どふりかくりのたいまうい
まうせやまうせおねんぶつ
○ぜにもいらぬぞなむあみだ
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀（しもこゝのこれ下あそふべし）
こめもいらぬぞなむあみだ
○ひまもいらぬぞなむあみだ
きこんもいらぬぞなむあみだ
○ちえやもごんもこれこちまゝ
たのむぞうかのりれのり

○ぎげをつけぬがふりよぎげ
そやうのないがよきくそやう
○むまれながらいきとこらゑ
るちをひらいてでますせな
○ぜんあくしよぞんのきつういふく
しまござするにもなむあみだ
○ねにもをきにもなむあみだ
たつにもねるにもなむあみだ
○これぞやすきごせのみち

ねぶつでいつれしをまもりん
○たのむこころをまなこにし
まうすねぶつをあかして
○いそげやいそげごくらくを
たのめやたのめごあんぶん
○むかいはござるそれないぞ
しでしれうちぞなむあみだ
○すうこく〳〵なむあみだ
けつじやうわうじやうなむあみだ

南無阿弥陀佛　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀
阿弥陀佛　阿弥陀
阿弥陀佛　阿弥陀
たすけたまへやあみだ佛
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀
願以此功德　平等施一切

同發菩提心　往生安樂國
至心十念

右十ぺん行じ終り至心廻向十念相續してどちく〴〵すねそこしゑうゑあかさ和讃りして退散する時又第一段の大總とつれどう組首をとなへおどりおがう家家まうへゑし　時よりて又首斗をうるかべし

〽第十三　暇乞（いとまごい）

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

○いざやこゝをだち（ひもくらく よもふける）よ
ちぎりまそうくゑどくへ よ
○こよいきてまはなれとても よ
きぢしうてみのうへでまて よ
○ともしいのちのうちならうぞ よ
あすまでるおいどうかうござさまん よ

○いつかうらやごくらくで よ
そでをつらねてゆきかへく よ
○さらばくもうさねぶつ よ
こがくはらすぞわちふぶよ ま
たすけたまへやあみだ佛 よ

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

十念

珎重（ちんてう）〳〵 さうぞ〳〵

爰に綱川氏信心胸にみち渇仰かよわ
隨まれく一つの大願を發し誓ふらく六
字生屋を旦にしてよまず永續と
かぎりとして一ヶ年に四度づゝ春[illegible]
おこしよ講鄰男女をさそひて此法
事をとうとまひ万代の子孫にもま
生死の苦海をまつ佛淨土の快楽をとき
いかん餘薰に廻し法界乃有情
ともに安樂林乃花のひらくる

われら子孫此發願を退轉せず即時
與田蒙豊教え氏名失卻せん輩は
三寶諸天神祇冥罰常に家門よ[illegible]向
して諸障をもらひ六親和合めて家門
退轉なからしめたまへ
願主敬白

圓通寺二十三世良安上人附法
迎譽淨運　綱川氏
臺譽妙蓮　同　妻

元禄十二己卯天十一月十五日

合掌　祭文

天神影向　地祇加被

日月清明　兵戈無用

風雨以時　崇徳興仁

災厲不起　務修禮讓

天下和順　國豐民安

○さいもんさささよろあしびや

南無阿弥陀佛

天下泰平たいへいや

國土あんをん民ゆたか

さてもめで〳〵やう〳〵ねぶつ

あとをこれ
これよりかへ

○帝王もかくもみそよあめを

六親きんぞくすべて

○宿世善根らいれい

三寶因果をしんずまで

○釈迦如来のりにあづかりて

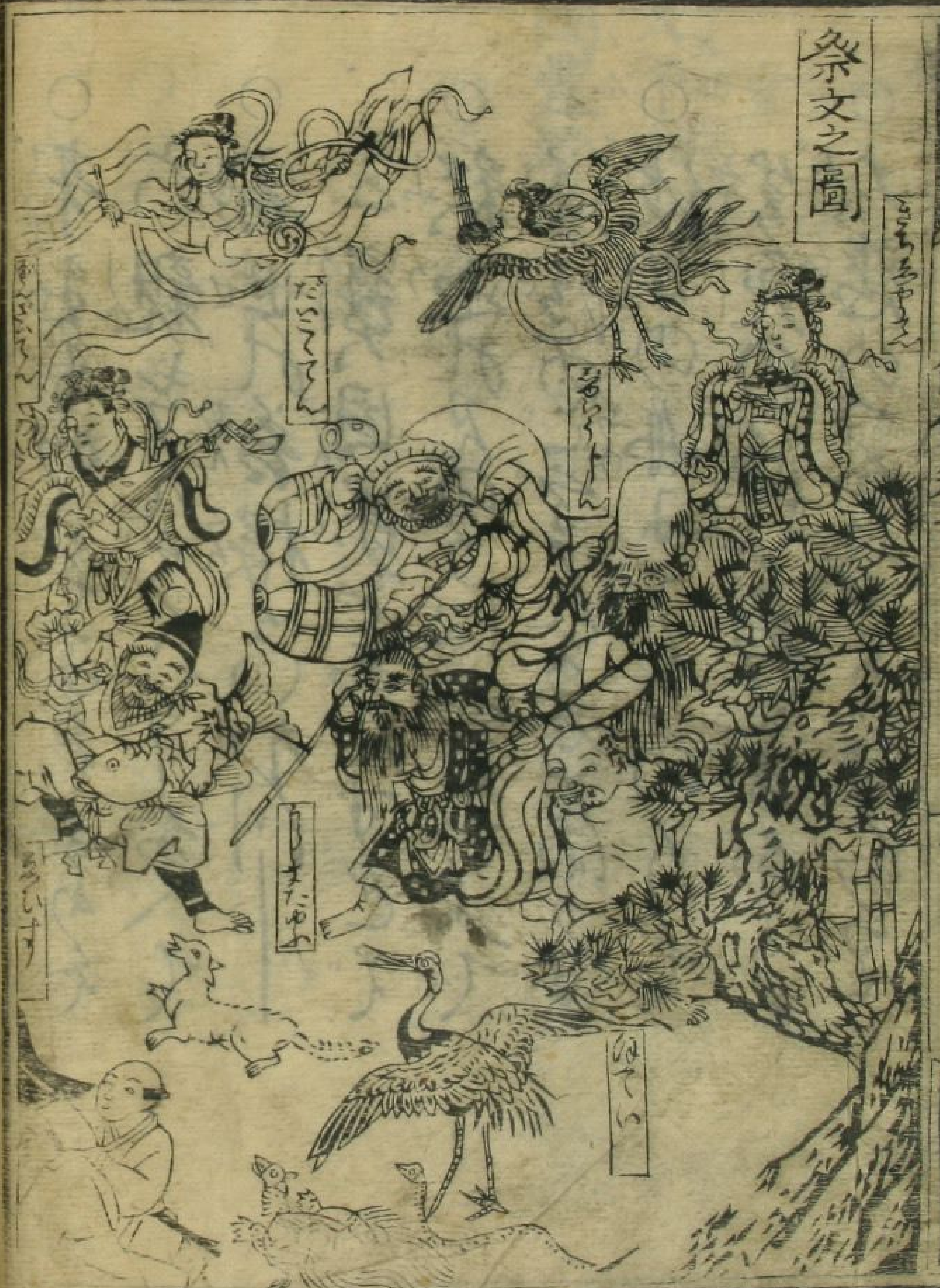
弥陀のごぐわんは弟子を渡す

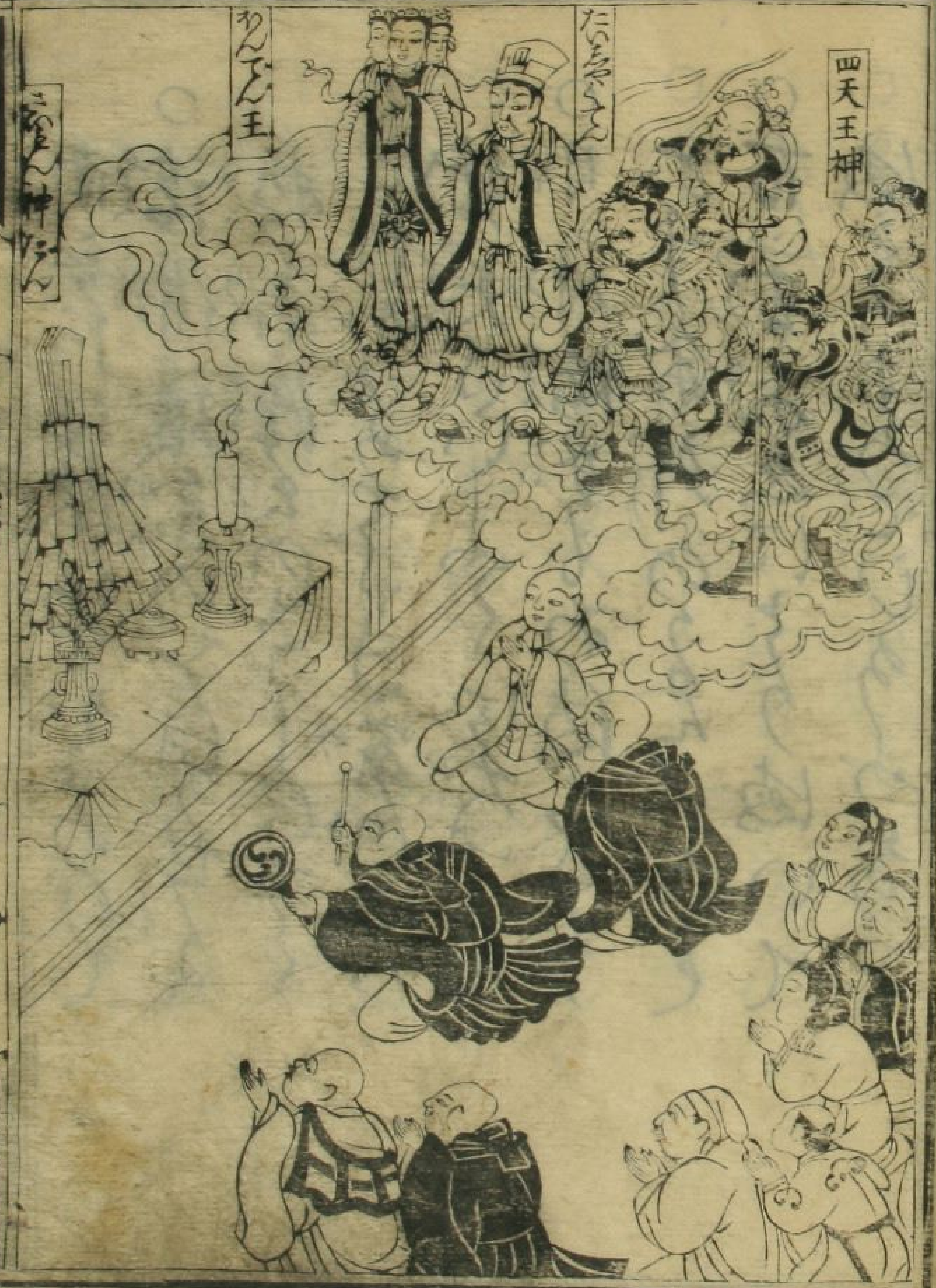
○他力の舟ようちのりて

生死の海をわたるなり

○大悲のつなにとりすがる

祭文之圖


きちじやうてん
だいこくてん
ふくろくじゆ
べんざいてん
ゑびす
ほてい


四天王神
たいしやくてん
ぼんてん王

○南無阿弥陀仏をとなあげて
諸仏護念のとひうぜるま
極楽浄土のきしにつく

○これほどめでたき家内中
梵天たいしやく四大てん
日月諸星もおまもる

○六十余州のかんじんを
百座千念にとり返いて
返そうよろこびあゝありも

○まして穢れりおくるちやる
ゑびす大こくおさうぜん
うがやかま神ふくろく寿

○うちは多聞やおていどの
地神かうじんとしとく神
三ぼうかうじん七ふくじん

○水神火神にいたるまで
天竺さいてんやおれけんなれぞ
天地乃名号とのつる哉

よろこび給ふもことわりよ
○いまゝでまゐりたゞいわりて
このたび生死をいづるよりて
○悉ごりくうちまうし
ゆるぎいでゝまいおどる
○悉じずたふもゆつさめく
おほ波のまへをざんざめく
○さてもめでたやこれは萬歳之
幾千万代さかふべし

○諸佛も常に影向し
諸天善神守護すれば
横病横死のなんもなく
○悪鬼わく神にげされば
福徳さいはいりみちて
○こゝろにかゝるこそあれ
まして因果をゑんずれば
○分限知足のさとりを得
いつもこゝろは大ふく人

○あんをんけらくに世を渡る
代々ねんぶつ修善して
孫々浄土まうまゐるべし

○三禅天の妙らくも
そのみハすいのうれいあり

○いまこのおどろきたのしみも
このよもかぎりのちのよも

○ながくそんぜよいたるまで
たへせぬけらくハ念仏

○よろこべくころか福よ
おどれやおどれうきたちて

○三界六道たゞおもひ
おもいたゆれど四生なし

○うやおどりよささハ遊て
かおけしくれうげもれく

○うきよをすつへとおもすれ
ふくべのうさにうらんかつさ

○常白七世までずてもない

多劫も現前一念よ
○三千十界唯一心
人情もはなれて自他とみる
○忘ざらくますれば境界は
かげごろうの人形で
○うんもうぢこもへだてなく
仏と衆生もおもひ形
○南無阿弥陀仏の称ぞう
こゝろがらくだ

珍重〳〵さゆまし

夫婦中能
衆人愛敬
息災延命
信心不退
臨終正念

南無阿弥陀佛
謹上再拜
十念

六親和合
福德自在
子孫繁昌
念佛相續
决定往生

南無阿弥陀佛
敬白

夫(それ)和光同塵(わくわうどうぢん)は結縁(けちえん)のはじめ。八相成道(はつさうじやうだう)ハ利物(りもつ)のをハり。今すでに累世(るいせ)にけちゑん淳熟(じゆんじゆく)して大悲(だいひ)本懐(ほんぐわい)の尊号(そんがう)を修(しゆ)す。三仏同恩(さんぶつどうおん)の本意(ほんい)にかなふ。本体(ほんたい)さやうの神慮(しんりよ)もとより深(ふか)こそしむものとし謹徳(きんとく)再拝(さいずい)すべし

當頭人(あんどうけん)ハ神楽(かぐら)太鼓(たいこ)をなして。賽銭(さいせん)誦(じゆ)し本主(こいしゆ)六親(しん)ならびに同行(どうぎやう)志(し)心(しん)

合掌(がつしやう)して十方(じつぱう)を礼念(らいねん)し。次(ついで)深恩(じんおん)を報謝(ほうしや)し。伏(ふし)て守護(しゆご)を乞(こひ)たてまつるべし

此(この)講(かう)を定(ぢやう)則(そく)とすべく随(ずい)機(き)を見(み)時(とき)とし因て。方便(はうべん)をまうけし。文(まき)あるときハ此(この)をもしきと。物語(ものがたり)しらしめ。男女(なんによ)のこゝろ銭(ぜに)讃(さう)歎(だん)すべし

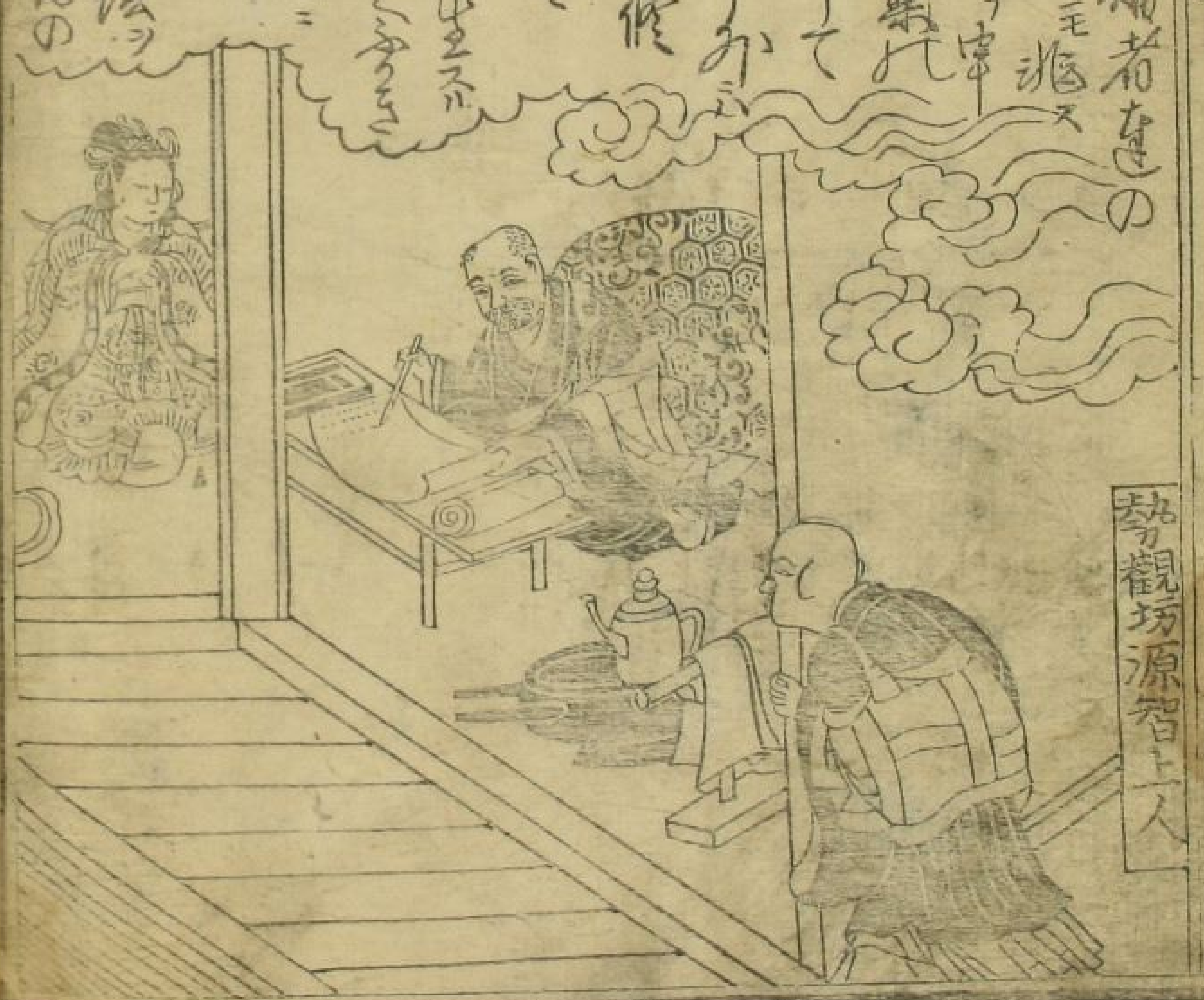
△一枚起請和讃

南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ
南無阿弥陀佛ヨ　南無阿弥陀ヨ

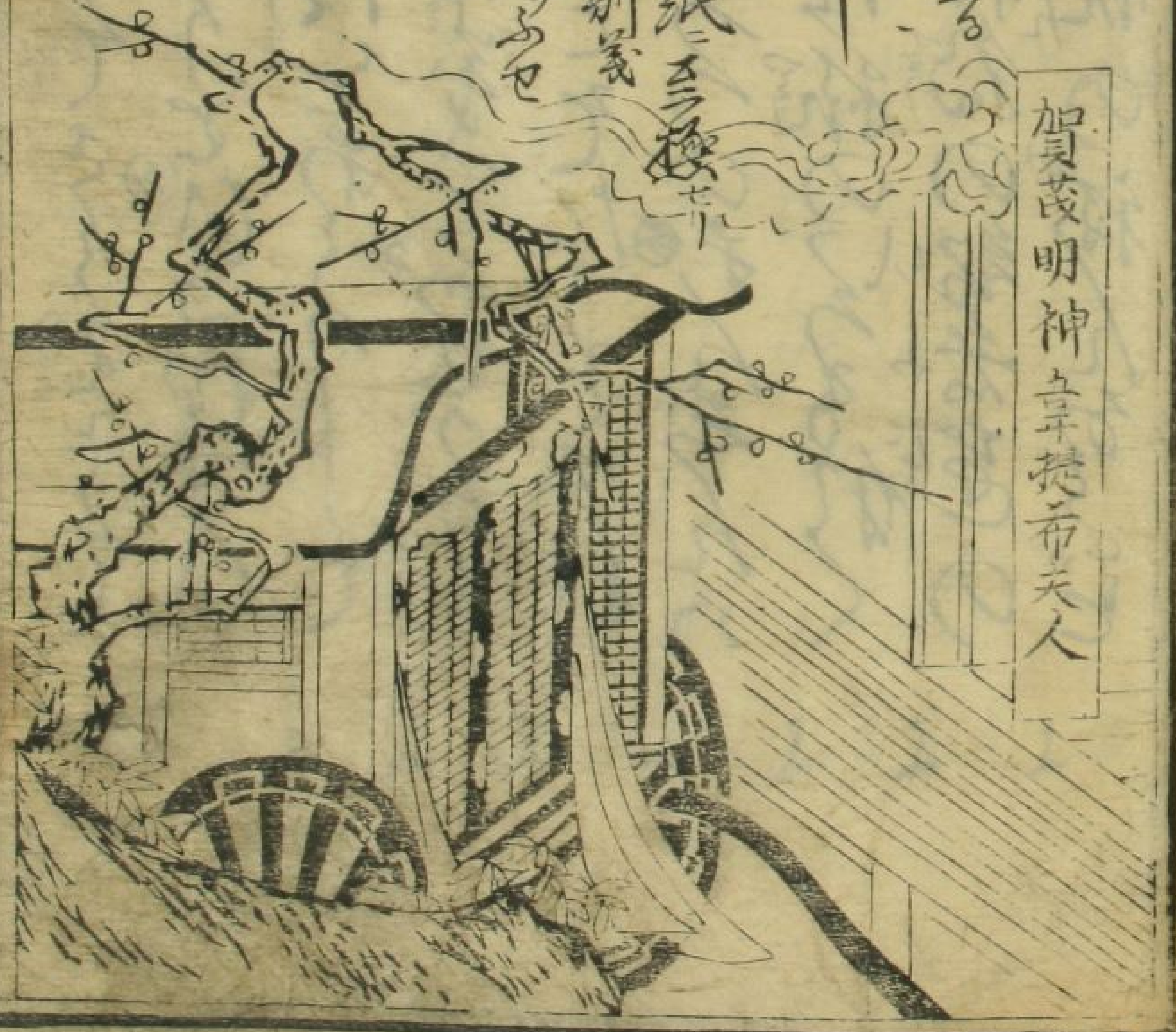
○釈迦如来の祢んふつハ　よ
上世末代えらミ祢ど　よ
○まけて末法万年乃　よ
極悪衆生をおかんとせり　よ
○きゝ念ん鉄せる折うよ　よ
弥陀ハいゝくれ善導と　よ

○勢至菩薩ハとの御乃　よ
円光大師とあらハれて　よ
○弘願称正意乃安心を　よ
ひらいてすゝめ給ひゆく　よ
○万人おしらくこれはきし　よ
いらく本願乃ありそてり　よ
○うね乃無常をあらハして　よ
やそぢの滅をしめすとき　よ
○かりうも儀の順神聖来希の　よ

もろこし我朝にもろもろの智者達の
さたし申さるゝ觀念の念ニモ非ス
又學文をして念の心を悟リテ申
念佛ニモ非ス たゞ往生極樂の
ためニハ南無阿弥陀佛と申して
疑なく往生スルゾト思とりて申外ニハ
別ノ子さい候ハず 但三心四修
と申事ノ候ハ皆決定して
南無阿弥陀佛にて往生スル
ゾト思フ内ニ籠也 此外ニおくふかき
事を存セバ二尊ノあはれみニ
ハヅレ本願ニもれ候べし
念佛ヲ信ゼン人ハたとひ一代ノ法ヲ
能く學スト云一文不知ノ愚どんの



身ニナシテ尼入道ノ無智ノ
ともがらニ同シテちしやノふる
まひをせずして
只一かうニ念佛すべし
爲證以兩手印
浄土宗ノ安心起行此一紙ニ至極セリ
源空カ所存此外ニ全ク別義
ヲ存セズ 滅後ノ邪義ヲふせ
がんが爲ニ所存を
記シ畢
建暦二年正月二十三日
源空 判



請に応じてさらぞとて　よ

○ひろめのりをひきむすび　よ

一枚起請をあらはして　よ

○末世の邪義をふせがるゝ　よ

ごえうべんこそたうとけれ　よ

○その祢んぶつのおんぎんハ　よ

善導と撰称のいろもなく　よ

○そろうて和語の智者達の　よ

さたする紀の祢んおうゞど　よ

○学文げぎやうのこうつんて　よ

さとりをそなふることもなし　よ

○たゞし三心四修をハ　よ

よくよくしきされど　よ

○そのみる人のこゝろあて　よ

さぶらうたもりことおうじぎ　よ

○念仏をのぶる人もたぐ　よ

往生うたがひなしとのそ　よ

○おもひしめるこそよ　よ

自力でこもるとくさかもと　よ
○こけとぎ志んと不廻向の　よ
三つの病のある人の　よ
○あしめもわるぞわるんと　よ
わるりしのふくすりあり　よ
○まるゝ智者達それふるまいを　よ
せずして袮ぐふてわざく　よ
○いろくげざとむかふれど　よ
宗旨を志れぜいとやす　よ

○たゞ智者ぶるなかくる愚者ぶるかくる　よ
身ぐるしくのまゝにて　よ
○助給ふとおもふとこそ　よ
尼入道にまじはれ　よ
○これぞ五劫のたくみにて　よ
人をえらまぬのりなれよ　よ
○釈尊諸経をかめてとき　よ
諸仏称揚にたちあふ　よ
○このほう称ねんぶつ安心よ　よ

ふかきこゝろハあきぞとて　ょ

○二世（ぜ）までうけてちかひまし　ょ

善祖（ぜんそ）のちかひのありがたさよ　ょ

たすけたまへやあみだ佛　ょ

南無阿弥陀佛ョ　南無阿弥陀ョ

△十念

和讃講會法船之序（わさんかうゑほうせんのぢよ）

南無阿弥陀佛ョ　南無阿弥陀ョ

南無阿弥陀佛ョ　南無阿弥陀ョ

○そもそも縁念ハあんゆるい　ょ

あそひで是（これ）をとゞめおきて　ょ

○わすれる邦（くに）のおんなまれ　ょ

ひゞをたてるも大ごんの　ょ

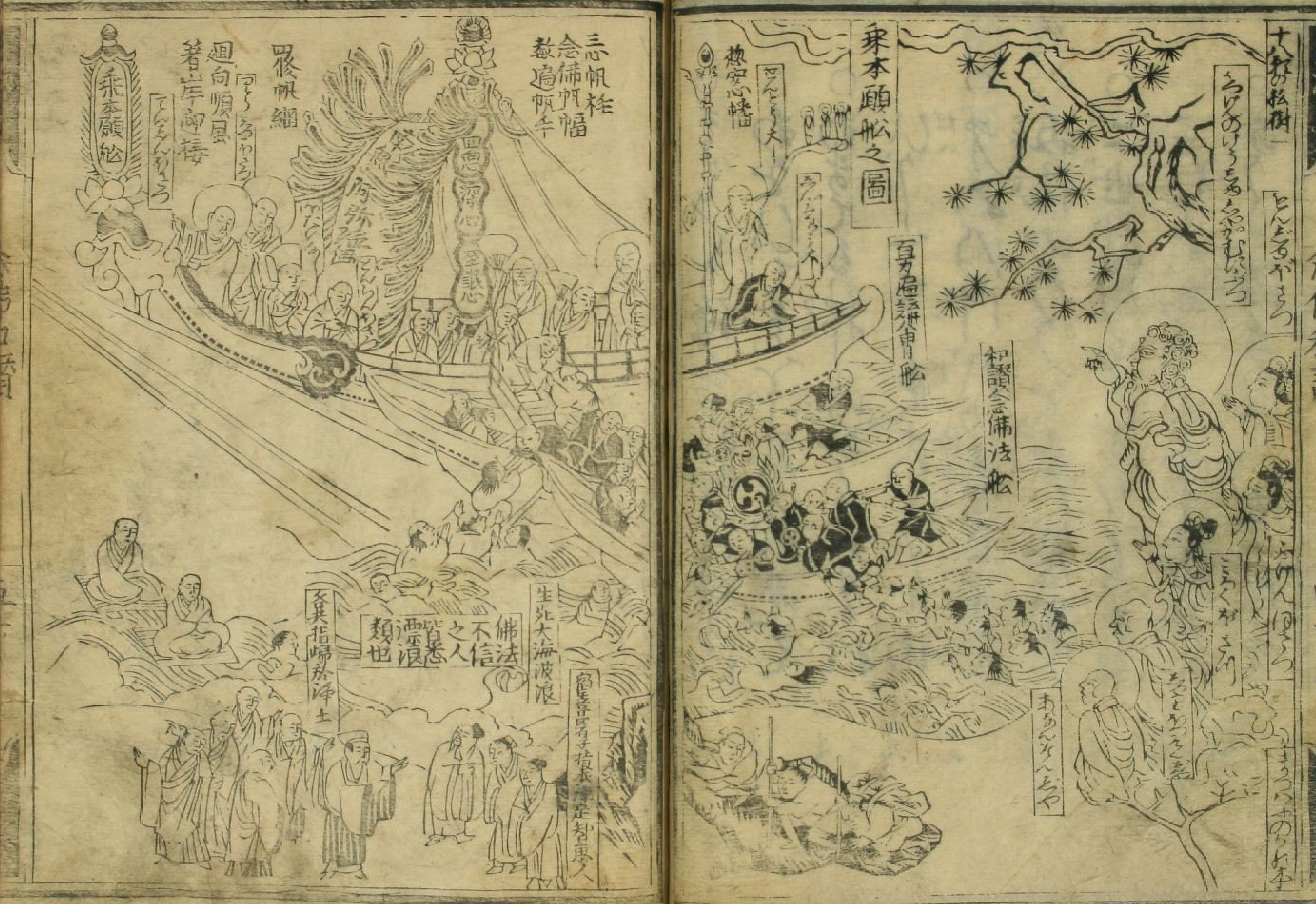
○才（だい）ある乃御代（よ）の光（きこ）さすく　ょ

面將（めんしやう）の乃りと世（よ）にさして　ょ

○二世（せ）れけらくをあすかふ　ょ

これぞひとりのみよふん　ょ

○ふうよ淨土（じやうど）れ一そん　ょ


乗本願船之圖
十八本の松樹
とんだめがさろ
ふげんぼさつ
こくうざう
あなんそんじや
和讃念佛法船
百万遍念佛船
ぜんだう大し
安心幡
三心帆柱
念佛帆幅
数遍帆手
四修帆綱
廻向順風
著岸迎接
乗本願船
てんじんぼさつ
南無阿弥陀佛
深心
至誠心
どんらん大し
生死大海波浪
佛法不信之人皆悉漂浪類也
終其指帰於浄土

○時(とき)はかくゑの己(こ)ろうあるだ　よ

○まけく弘(ぐ)通(づう)のおんさいふ　よ

宗(しう)祖(そ)導(だう)師(し)の位をあげて　よ

○圓(ゑん)光(くわう)大(だい)師(し)とをくられし　よ

大(だい)僧(そう)正(じやう)にんぜらる　よ

○ときに僧(そう)正(じやう)おんちひの　よ

もよれさくみのわすまれて　よ

○夜(よ)をよめづらしきく念(ねん)佛(ぶつ)の　よ

導(だう)念(ねん)のみのりをひろめんと　よ

○真(しん)言(ごん)密(みつ)のしそいをうけ　よ

胎(つき)まて三論(ろ)とをよろして　よ

○東(と)ふ(てん)了(まん)のけちゑんを　よ

まうみき志ひのてゞそふり　よ

○ときにうめくるお福ぶつの　よ

ご念(ねん)のさそふ導(だう)かれだ　よ

○みやこいなかのはるまで　よ

むすそねのりのあつぞなし　よ

○弁(みう)につきてもこの里(さと)を　よ

惑ひ迷ふ乃りのみ　よ
○あかゞらぬといふ人ごゝろ　よ
さそふ和讃の詞よきし　よ
○自然に信とさとりして　ミ
みかどとがめぬ人ぞなし　よ
○取かへ浄念乃式をきく　よ
まうしこそよろこびて　よ
○道俗貴賤ゑらずそなく　よ
老若男女おしなべて　よ

○先亡霊位にいたるまで　よ
一蓮倶会の帳よいり　よ
○月に一度の講念めて　ゞ
和讃念仏勤行して　よ
○むすびそめぬる講中の縁　う
同行浄土と思ふすゑ　よ
○いまよりのちはこ乃和讃　よ
たゞふれしごとくとなへとも　よ
○自然は功徳周遍して　よ

たぐひなき利益をかうむらん　よ
○常にほとけにまもられて　よ
とく浄土にはうまれけん　よ
○厭離穢土をふりすてゝ　よ
法界衆生をうるほさん　よ
たすけたまへやあみだ佛　よ
南無阿弥陀佛ヨ　　南無阿弥陀ヨ
十念

此講会乃和讃は。十九夜講念仏の講会をあらためて。百万遍の講式と学び。和讃念仏の講会をとりかへして。一蓮倶会の因縁をむすぶ故。これより入乃信人へ。[illegible]郡[illegible]村林蔵寺の念により。百余人。六井村西法寺の[illegible]によ入老若八百余人。同村観音院の講に入老若男女千余人あり。講席より[illegible]をつらねて。[illegible]事など講するがごとくに[illegible]

まことをつくすものなり。其室にこそ。
名越流大澤圓通寺の隣村なるゆへ
に。法會もなしえざる事をなげき。
彼どもよかつまふの句を義なり。もし機
縁熟せる處くに。此和讃流布せば式
式をもまなびぬべし

元祿十三庚辰二月十四日

跋

夫念佛は。加祐法師は。八月利をとなへして。
利他の教高をも事とし。況や恭敬名利を
いとふて殊勝の志を現ずる事なし。
身を雲にして跡をたつ所ゝさだめずといへども
のこりし人は。偖よかつまなる事多し。依て
去ぬる秋の法よりて。三経の縁の奥義を開て
百七十首の和讃を作り。讃嘆正行乃

律呂にならべて。陰陽自然の調子を和し。往時ハわらんべをさそひつれて。踊をあそびとするようにし。今時ハ和讃流にうつるなり。然れどもひとをして。閑室に坐り吟ぜしめ。了念和讃に随従して。外相の意情を存する也。称名を護念に摂取せられて。悲願を浄業に決定す。客人是を美談し。一人是に懐くようにて。流行する事。村々里々にミちミちたりなん。家々に願照をもて発起の縁を結び。然して

教外の脱塵を愛楽するあるひハ止あるひハ又修するといへども。いまだ了義を覚ずる事あたはず。罪縁をおそれ。蒼生をたすけるのところにて。えうらざるゆゑにこの和讃を得て。俗是をこゝろに他力の宗風を解し。たゞこれを修するに。念仏の気味をおもひつゝ。順次離のなげき。亡家に出ぬ。実に是八万四千の法門のかうして。然も一切仏陀速得究竟の方便なり。何れの宗

こゝをもつていはん。誰の人か是を修せざらん
業。弥陀別願の名号を称讃し。
経文にきこえさせたまふ事なかれわるゝ事。柿
此和讃ハ梵漢語の唱葉を離して。濫
語の未熟とならずくよのぞかしく遠近を和語に
風わらげ。偈頌を和讃に述。仏学の軌
則を学んで。三部妙典をとなへよのぞかしく
行者を弥陀よりよろこく。詳明と世風に
和をだらなる便宜と時を持す

かなしみて感應なる事ひとし。おそらくハ是
縁讃によりたる月輪の無量なるらん。
ことさら村里にみなぐれ行事。風の草を
なびかすがごとし。老若男女信じ行ずること
と。渇して水をのむが如し。是又在家乃男
女のこのみならず。浄家の寺院隠者禅門等
の輩ハ月信じ行ずる人おほし。輩ハ證誠して。
男女のへだてをもてあそぶわり。是道行人の
人。世間の人へし。輩ハ又信教してひろめて

なし方便破壊して佛を出す構なりけりしふことに。わりひハ新義なりと講じ。狂言綺語と愚なる僧も當今ハ佛法世にすたれざれど。さまでの方便善巧なしとのたまひ。僧ハ寺院の隣村なる。まきんを勧めずともなきしと嘆く。僧を出家の若きものいわずもがな家業をつがせず信ずべからずと剃し。僧まさ宗旨の行法をしらざるがゆへに。郷中の男女行ずべからずといへる。僧ハ信ずる人の経をよみ。行ずる人に経をさらしふ是皆愚痴偏執我慢憎妬不信虚仮の咎にて。天魔に附託せられて。かくのごとくの狂言をなすも。嗚呼はづべしかなしむべし。しかるに此方便獅子身中の虫におゝかたきまでもなしく。壇中にいりまじれん事を。これがために方便とめぐらして。漸々念仏をそのめ。工人に命じて。棒まちりぞめんとするに。世財を用ひして。自力にかふぞ。檀流とそゝめんとするにいまだそろ

縁にあはず。こゝろざしを定めて。功を後の人にはます。若しこゝろざしあらん人。予が志願の功をみてば。其人天福を乃少善にあらず。廣く二尊三佛の化儀をたすく。わが無邊の大善にあらずや。是するまち罪根を。和讃の流傳をたすけ。和讃は念佛の信行をすゝむ。念佛は往生の得縁をきゝまいらせん。往生は諸佛の本懐なれば。希くは此こゝろざしを行ところ。其功むなしからざらん事を。于時元禄十三庚辰の歳林鐘下旬

佛子寛照謹誌

武江
増上寺表門前
林十郎兵衛彫刻

附録　心行自然和讃念佛流傳記

周雲洒潤則芬澤易流飛風載響則音徽自遠是以德教俟物而濟栄名縁時而顕學有加祐和尚者野下州芳賀郡之人也受法於良安（同州太澤山円通寺二十二世）上人矣悳解秀乎離塵高窺佛智相負笈乎埃霧部類頑魯踞則疑猿狗走則怪麒麟如雲不定住如水追窪流會門人之景慕逃而不應兒稚童之笑詈共而追戯清貧轉樂孤獨自安伽梨綴多不全盋多水甁無具藁榻不飾艸衣無樞節操異於世誰能窺機

闡乎蓋是扶桑今世散聖也明白知時運審詳鑑機儷應方隨類以欲廣度被催大悲於三佛無極令蒙加祐於群類無數課佛之暇自傾智慈使製和讃念佛教示之先淺薄之縁露布之本边鄙之邦故郡里隨縁習弄若或修之祭禮神社行之報謝君恩或賀雙親之宿壽祝九族之新婚又祈急難諸病咒卒死招覓野葬勤之送忌中唱之吊市鄽山郭郡縣里村盡流莫不周通矣加之饗膳宴座謡和讃勝會談席誦念佛老若如魚聚男女如蟻群不禁永棄博塞爭

賭不制停圍碁勝負家家以不勤和讃爲瑕璞人人以不称念佛爲恥辱卑支行之共貴高士不修互作機織娘女口之運緯梭綷針婦嫗脣之綴裁絹襞厭婢耳并奴唱之無苦惱芟草童樵木翁吟之忘疲労稚兒會戲之使僕馳弄之何夫盡詞耕耘用田謳運船代棹歌是唯能所催此善巧也家縁繁冗恆念佛在口産業資生儘和讃助道合國同行互無諍論四郊法友共忘親疎個戸不鎖無窃盗之恐衆人不諂無憎妬之愁不治而國治不祈而泰乎也音邑催信

行彌勇和雅感心業益進思在歸命三心即具脣轉稱號四修自備念念無間無受而戒品持日日不斷不覺而罪障滅心光包身護念常住無横難亦無横死蒙延年轉壽之益聖衆迎接不違本誓臨終正念唯任慈授諸邪業繫無能礙者絶氣忽菩薩身託華臺即不退土也嗚呼是此行法似麁言歎語皆歸第一義如狂言綺語悉入佛妙道不勞坐而傚賓相眞悟不攝心而會法性妙德知如如是亦不知修共合此理好此行者不厭厭樂此讃者不欣欣富貴不惜貪窮不貪歳與月盛且時正勤之禮日沒方蘭盆修之供靈會壇六齋十齋毎會講朝昏中曉相續日時矣起処郡邦溢流周郊始世今此　聖代興仁豐崇德順嘉祥出明時仁智舞紫庭必　此流傳末至万歳之後乎雫於夫此法也異法而流正法別風而起高風殆絶思議際宜是爲常人作也哉高崇深信者所以之慕寛仁之德也野下州者殊和讃化道始興之縁地也維宿縁所共感乎就中都賀郡礒村良招庵者是変信上人終焉地德光永停郷里淨業場也祐

和尚崇先輩遺德教和讃門侶結講會寄此而永規
勤之雖無盟契遠近集于時雖無定式同行不相乱
貴賤不隔席繙素同文生同入和合海且倶會妙相
著兵庵主淨源法師發願欲鑄阿彌陀像爲講會本
尊而擔栗樹步武陵告檀越蒲田氏兵庫輔重行共
議未諧予今象彫力老眼攣手雖不堪作爲感喜尤
至矣諸亦難默止卒應諸從是命工匠共教助手中
秋終始刀臘月始功已成也又智英秀山頌超三力
生因通寺下學士而和讃念佛棟梁共淨源迎本尊
休儀銘曰値偶聞和讃勤和雅盡深義妙音偕諧信
一日（臘月四日）延令謁參麻布　禪室覲覿應　尊聽故
各列勝席先修講會讃次念佛大綱引接攝取至心
發願至心廻向等讃也　尊聞竟感嘆称美重　命
修祭文教令祝禱　寶祚延長台齡龜壽大母万歲
諸臣義忠武門常榮天下泰平國豊民安
國家大恩酬謝于此於是　尊下忻然即曰今此法
也詞野而義高異風敷正法可謂工也我雖未見加
祐今已聞偶和讃預知彼心即付我壽眞恩如行見

永留良招庵共行法是爲證而非爲名言竟授與一鋪尊影是予愚彩自写也時不圖　縁山貫主嚴駕訪退座故各期一座拜謁矣又一日（臘月六日）下　尊命於方丈室俾勤之（雒東獅谷使澄隠上人誘引之）　於是含愁悦謁参　絳帳而於内道場勤行和讃念佛踊躍至心廻向等數個法條法要滿散　尊聽竟即告曰我先隠室聞其一條今重聞詳是異方便大演本願正致言親愚俗應辺鄙機欲但思至急念廻向條聊有遺事果號訛脱句文不分明夫本願正意念佛大利趣已讃文分明是此持名也大悲工縮因縁果滿德施設備易行所以之爲本願慈心無極偏爲最下根弁極悪善巧也故果號六字含藏万善以普施譬如包至寳於囊中施之受者若持囊即保寳破囊宝隨漏六字果號是万善寳囊也故分明称之万德悉持若句文訛脱称邑僻則万善寳隨漏豈不惜昔我善導大師始建五會念佛法照禅師得之大興盛出在五會讃就中從今後取下二會用和讃急念佛可手四光大師亦有示曰一念持名以當一度往生

非以精修積數遍信以妨行行以妨信奚不慎乎以降師資何違此旨當山中興觀智國師以此義傳付東照神君大神君也爲眞宗護法自製三十五嚴條其中至第二十七條大訶此事其文曰悪徒出來近年興邪教違經文釋義私勸安心闕六字名號唯称三字四字褌々謀計令誑惑衆生是須魔民所行速可令追拂事矣嚴制如是以一個闕称蒙數多罪名孰不懼怖哉吾子等帰郷告之於祐師速爲改正言竟即操毫書名号授與之又慈賜精貨餞帰路各謹承教誡不勝歡喜作禮而退畢仰惟大明位乎高以照物法本如以精所謂五會念佛者法照國師法事讃云第一會平声緩念○南無阿彌陀佛第二會平上声緩念○南無阿彌陀佛第三會非緩非急念○南無阿彌陀佛第四會漸急念○南無阿彌陀佛第五會四字轉急念○阿彌陀佛則讃云第一會時平声入第二極妙演清音第三盤旋如奏樂第四要期用力吟第五高声唯速念聞此五會悟無生一到西方受快樂永不輪廻入苦坑發心念佛輩須堅踰終

沒定上金船迴願衆生皆得往直向西方坐寶蓮中方世界實爲精彼土衆生不可輕衣裓持花供養佛還來本國飯經行發心念佛度群生願此五會廣流行六道三塗皆攝取蓮華會裏着眞名共同讃妙音云第一會時除亂意第二高声遍有緣第三響颺能裏雅第四和鳥真可憐第五震動天魔散能令念者入深禪等功德難測然如四字轉急念闕南無二字比之

神君定規有其咎若轉急隨善闕称何有咎蓋轉急是正称非訛脱（訛脱太奈摩伊陀部。耶广伊多。南伊陀等称也）神君制訛脱咎故云称三字四字噫今至澆醨明隠精修埋弊塵訛脱競都鄙邪風啾嘈矣敢止實是可惜妙珠有玼捨同瓦礫非衆和氣致祥之德邪至鋪精修接人也幸甚哉是非迎夲尊三僧何來此雖來非和讃念佛之德豈得拜謁

兩縵帳和讃深義與雅音妙同統以感喜證護時節無因縁妙用不可思議也諸尊加祐實是靈瑞就不仰信耶嗚呼善巧非一方便多門也夫齋戒浄衣持清潔空閑稱定時上日如法而修者是別時行儀也尋常不然不嫌時

處諸緣而行住坐卧住口稱念矣異朝少康禅師與布貨友稚童和國空也上人打鳧鐘跡道路是邪云廣行況摩尼投泥水去濁就清穢口稱之積淨業彼崇真佛秘号一向執佛正制以常時散行念佛偏讃爲法孽者是未探彌陀本願熟致而遺大悲普濟妙用豈云盡理伏思此和讃念佛边鄙發村里流今露布　當山偉聞證運瑞雲出法岫布霞四郊而雨甘露潤万田乎我幸應時見聞此奇事要有宿因歟故錄從前事實以備向後廢忘者如斯

元禄十六癸未歳臘月佛成道日寓于
緣山別所清涼臺
淨業弟子　光阿謹書

去癸未冬武陵有火灾和讃舊板燒失畢故懐慕族愍矣下野芳賀郡下高根澤村信士齋藤太兵衛尉法名遺誉宗嘆発願請棄世貲繼其財也爰我輩矣爲迎本尊舊臘出府登緣山奉拜謁　両大僧正則尊前修和讃念佛恩澤無窮也今幸聞藤氏之願仍

欲其資再計離行而請之祐師師怡然宜諾焉即賚文外刪除自詞以附流傳記且補圖繪書成聿授剞劂師竟願此功德不唐指十方三世以弘通以無涯也

元禄十七甲申歳仲春癸酉

大澤山下

良光智英
良靡秀山
良寂順元

別板「心行自然和讃歌念佛」（鳥居清信画のもの）には

此図と同じ筆の図巻頭にありてそれは「安養

舞場會」といふ所に「歌舞菩薩の踊」とあり、左下

の所に、「心岩謹写」と記せり、此一枚だけが鳥居の

繪でない事を証したるものゝ如し、而して事書きは

画者の名を記さず、すべて同筆の如くなれば皆心

岩の繪なるべし、心岩は巻首に題したる増上寺別当不

断念佛徒衆にて光阿と称し頑夢の號あり、そを印章

の如し、

十

文

剛

也

元

欲共資再計離行助請之祐師師怡然宜諸焉印賛

十授剞

無涯

早稲田大学図書館
011488556802